ルコト八十一里餘、東御所內、南西宿、北杉森、巽ハ方友定、艮ノ方上田等ノ諸村ニ隣レリ、村高五百七十五石四升五合

(田畝)三五、〇〇〇三　内〇、四二〇六畑　一、一五一五屋舗、

(租税)米二六七、〇九二七

(戶口)戶三四　口一四八(男七四 女七四)　(畜產)牛一一

(神祠)津島牛頭天皇祠　祭祀五月四日、祠官東方太夫」出雲明神祠　祭祀四月初午、供田八畝廿四歩、以上二祠佐々木神社ノ末寺ト云」　宇佐八幡宮　祭祀四月初午、

(佛寺)法泉寺　淨土宗淨嚴院末寺、本尊彌陀佛」　地藏堂　木像ノ地藏ヲ安置ス、惠心ノ作ト云、

(橋梁)梁二

(源泉)金江泉　松木生洲泉　上野泉　谷殿澤泉　以上四

(川溝)溝三派　一派友定村ヨリ西北ニ流レテ、西宿村ニ入リ、二派共ニ御所内村ヨリ西ニ流レ、其一ハ分レテ二派トナリ同ク上田村ニ入レリ、

(小地名)松本　澤梅　四之坪　於多波稱　以上四

(物產)

以上ノ諸村皆山里ニテ、穀類蔬菜鳥獸草木等外ニカハリタルモノナシ、今聊コヽニナキヲ載ス、

蠶　夏ノ比、農業ノ隙ヲ求メテ是ヲ養フ、

簡　長田村ニ作ル者アリ、世ニ云、近江表ヲ織出ス、

栢大樹　土居之端ニアリ、高三丈九尺、圍リ一丈二尺、枝葉茂リワタレリ、凡四丈二尺餘。此外淸瀧寺ニ大樹多クアリ、

○名勝

蒲生野　坂田　柏原

右何レヲ指テイヘルトモナケレバ、姑クコヽニ載ス、當國ハ大嘗會ノ悠紀次岐ニ當ラレシ國ナレバ、名所イト多シ、サレド未其地ヲ渉ラザレバ、更ニ考ヘ得難シ、

蒲生野　仁和の御時大嘗會の歌　よみ人しらず

拾遺集　かまふ野の玉のを山にすむつるのちとせは君か御世のかすなり

坂田　仁安元年大嘗會悠紀献たてまつりけるに稻舂歌　皇太后宮太夫俊成

新古今集　わふみのやさかたのいねをかきつみて道ある御代の始にそつく

柏原　海道宿次百首に　爲相

おもひくたる山のすそ野の柏原もとつ葉ましり茂る比なり

今按ニ柏原ハ佐々木等ノ名、和名抄ニ見エズ、但シ柏原ハ伊香郡ニアリ、

○若狹國

今按ニ當國ハ我先公　參議正四位下扶義君、近江國ニ居玉ヒテ、當國ノ守護職ヲ兼玉ヒ、其後　四郞左衛門尉高氏君、及　右衛門大尉氏賴君等亦兼領リ玉ヒ、又其後　參議從三位若狹守高次君ニ至リ、慶長五年當國ヲ擧テ、十二萬石ノ地ヲ賜ハリ、城ヲ小濱ニ築テ移リ住玉フ、傳ヘテ世子　忠高君ニ至リ、寬永十一年加封アリテ、出雲國ニ移ラセ玉フ、其間凡三十五年、神祠佛堂ノ頹廢ヲ興シ、田祿ヲ寄セ玉フ、其治績傳ヘテ今尙彼國ニ存レリト云、其中常高禪寺、及七尼寺等ハ尙管(アツカ)リ領ル處ニテ、彼寺東西二門ノ間ニ、官舍アリ、院宰二員ヲ置テ、院中ノ事ヲ掌ラシム、因テ今聊コヽニ載ス、尙詳ナルコトハ、森崎信英ガ編輯セル若狹守護歷代錄、及七院世代譜等ニ見ユ、

常高寺　凌霄山、榮昌院ト稱ス、若狹國遠敷郡小濱ニアリ、禪宗妙心寺末寺、本尊釋迦達摩ノ二像ヲ安置ス、寬永七年我先公　宰相高次君ノ夫人　榮昌尼公創立シ玉フト云、尼公諱ハ藤子、淺井備前守長政ノ息女、先公逝去ノ後薙髮シテ常高院ト稱ス、夙ニ佛乘ニ歸依シ玉ヒ、一禪寺ヲ建玉ハントス、時ニ槐堂禪師江戶ニ出テ、芝東禪寺ニ居レリ、尼公召見テ其夙志ヲ語リ玉ヒ、因テ　幕府ニ請テ小濱ナル後瀨山ノ麓ニ於テ、營造ノ事ヲ起シ玉フ、此地昔常在栖雲地藏東光等ノ四院アリシニ、今皆廢レタリ、因テ其故址ニ就テ、川崎六郞左衛門ニ命セテ、事ヲ執ラシメ功成ルニ及テ、槐堂ヲ以テ開祖トシ、號テ栖雲山常高寺ト云、其後別ニ栖雲寺ヲ建ルニ及テ、凌霄山ト改ム、　尼公來リ慶セントシ玉フニ、病ニ嬰リ、得果シ玉ハズ、寬永十一年八月二十七日逝去シ玉フ、行年六十六、遺命ニヨリ此地ニ移シ葬リ、塔廟ヲ立ツ、常高院殿榮昌尼大姉ト稱ス、其後尼公ノ侍女小少將新太夫多葢志母知也保等ノ五人皆薙髮シテ尼トナリ、各草庵ヲ側ニ結ビ、尼公ノ爲ニ香華ヲトレリ、又近侍ノ尼楊林祖旭ノ二人モ同ク來リ住

リ是今アル處ノ七尼寺是ナリ、時ニ近江國蒲生郡野田長田兩莊ノ中二千四十石、慶長三年八月八日、豊臣公ヨリ尼公ニ賜ハリ、以來領知シ玉ヒシニ、遺命ニヨリ此寺ニ附與シテ、修理齋食ノ料ニ充玉フ、寛永十一年七月六日、忠高若出雲ニ移ラセ玉フ時、長田村ノ內百十石ヲ以テ附與シ玉フ、

於江州蒲生郡長田村之內高百十石者爲寺領令寄附畢全可爲知行者也

閏七月十五日　　京極若狹守忠高(花押)

常高寺

同十五年二百石加ヘ玉ヒ幕府ニ請テ擧章ヲ下シ賜フ

若狹國常高寺領近江國蒲生郡長田村之內三百石新令寄附之畢當寺者爲故常高院禪尼菩提所永收納不可有相違之狀如件

寛永十五年二月十五日

御朱印

是傳ヘテ今ニ至レリ、開祖槐堂ヨリ南雄萬里稜峰白巖等ノ諸禪師相嗣テ住スト云、

桂久院　桂久院龝盛尼ハ、初小少將ト稱ス、近江國高島郡田中村ノ人、三好三盛ノ女也、年十三ニテ榮昌尼公ニ仕ヘ、萬ノ事能尼公ノ意ニ叶ヒ玉ヒ、寵遇殊ニ厚クシテ、起居御許ヲ離シ玉ハズ、大津ノ難、大坂冬夏ノ陣ナドニモ從ヒ奉リ、和解ノコトトモ尼公ニ代リテ功多カリ、尼公逝去ノ後、若狹ニ歸リ、薙髮シテ後瀨山ノ麓ニ庵ヲ結ビ、且暮尼公ノ爲ニ香華ヲ供リ、年老ルマデ怠ラズ、萬治三年六月二日年八十四ニテ寂ス、常高寺ニ葬レリ、其後永樹惠雲惠權惠秀惠玉惠梁等ノ諸尼相續テ住ス、

法心院　法心院、日運尼、初新太夫ト稱ス、氏族詳ナラズ、尼公江戸ニ仕玉フ時、始テ來リ仕フ、事ヲ執テ能ク辨ス、頗ル文才アリ、書ヲ善セリ、往復ノ書札皆命セテ書シメ玉フ、屢賞賜アリ、尼公逝去ノ後モ、尙局中ノ事ヲ執ルコト、三年後遂ニ常高寺ニ入テ薙髮ス、日蓮宗ニ歸依シテ、法名ヲ受リ、慶安四年十月三日寂ス、其後妙芳祖長祖諦祖般祖均祖因等ノ諸尼相續テ住ス、

光雲院　光雲院丁春尼、初メ多藝ト稱ス、何許ノ人ナルコトヲ知ラズ、或云、備前國ノ人赤田氏ノ女ナリ、尼公ニ仕ルコト年久シ、紡績ヲ善クス、衣服錢帛ノ事ヲ執シメ玉フ、最任用セラル、尼公逝去ノ後法

戒ヲ受テ薙髮ス　寛永十七年七月三日寂ス、其後日精妙法智俊智根楚瑛等ノ諸尼、相續テ住ス、

清涼院　清涼院、宗惠尼、初志毛ト稱ス、江戸ノ人渡邊氏ノ女ナリ、尼公ニ仕ヘテ、巾櫛ノ用ヲ務ム、逝去ノ後法戒ヲ槐堂師ニ受テ薙髮ス、萬治二年十月十一日寂ス、其後昌清崇閑妙解慧恭慨妙宗積等ノ諸尼相續テ住ス、

昭陽院　昭陽院、妙玆尼初知也保ト稱ス、何許人ナルコトヲシラズ、女工ヲ善ス、時服裁縫ノ用ヲ以テ、尼公ニ仕フ、最寵幸アリ、逝去ノ後々瀨山ノ麓ニ居ルコト數年、遂ニ薙髮シテ此院ニ住メリ、慶安五年七月十六日寂ス、其後祖林智蓮義要智珊義琮等ノ諸尼相續テ住ス、

臨春院　臨春院、楊琳尼、氏族詳ナラズ、幼ヨリ尼トナリ、尼公ニ仕ヘテ持佛ノ事ヲ勤ム、榮昌院造立ノ後、寶冠釋迦像及榮昌尼公ノ靈牌ヲ移シ、祖旭尼ト共ニ香華ヲ供ス、寛文二年四月十九日寂ス、其後壽寶惠宋貞性愼素淵祖柏等ノ諸尼相續テ住ス、

節心院　節心院祖旭尼ハ、近江國高嶋郡ノ人ナリ、小少將ト同ク幼ヨリ尼公ニ仕フ、慶長年間薙髮シテ尼トナリ、持佛洒掃ノ用ヲ勤ム、尼公逝去ノ後、此院ニ入テ住リ、延寶七年四月朔日寂ス、年八十、其後智光智祐祖亨智珛智祐惠湛智聞智窗自省等ノ諸尼相續テ住ス、

榮昌院上梁記

夫常高院殿、松嵓榮昌大姉、昵近官女居城外者、玆有年矣、于時票國王之歲命、僑居後瀨山下、苟易地皆然爲其山也、往昔在一尼遐齡經八百、尙名溢四海、男女雖異、咸其齡算、則八百彭祖可幷按矣、道院是不尋常靈場、土地之因緣、尼道相慨者、豈長壽之祥瑞乎、越撥開閑地、創建招提寂寄比屋輪奐美哉、故擇令月佳辰、命野衲請棟札之銘、雖拒辭不止、仍述俚語、祝璫大云、

寮有比屋玉樓臺、修造功成絕點埃、河伯水神護持道、千秋長保棟梁材、　　花園末葉周三　誰昔焉

寛永十六年屠維單閼南呂如意珠日

再興上梁記

榮昌院上梁之記、先輩所書著明也、雖然數歷多深、星霜漸移、七院之尼衆、不忍見鑿壞垂頽朽、唯歎虛厭嶺懸大息耳、于玆元文之冬、傳顯於丸龜府、纂修覆之　府君懷時機之雜關、不成新之、明年寛保之夏、遂降於命、替其蝕柱、直其傾床、到邸

其鑑圳、美於古也、偉哉 營昌公大姉、烈々有溢
餘之令德矣、加旃圳外幾孫若干尺、如遊兩邊之通處、
爲献晨葬昏燭之便者、尤夥、所希斯堂柱礎堅萬祀
大姉之遺蔭擁後昆、今也工終斧不成風、乞余再銘之
仍贅于右記之後、寛保改元辛酉稔初秋中浣、凌霄數
萬元、欽書

院内奉行　永井助左衛門義蕃
同　武藤新右衛門直達
丸龜普請奉行　杉村太兵衛
同所棟梁大工　辻本字左衛門
小濱棟梁大工　藤山祖兵衛法高

惟時寛保改元、龍舍昭陽、作噩林鐘初絃、龜府城主源
高矩公、命工重修營昌禪院之興堂、而今落成之、秋九
月五葉院内諸尼公等相引、收皈葬牌於錦帳裡、仍令霄
孀敷閑梨恭做香供之次、打遏小伽陀法喜旻分之乙、
偉丈夫衆志阿孃、餘榮葉々古今昌、靈牀重補按牌
子、縱隣秋香滿霄墻　　萬元須數錄呈

摠門上梁記　常山者、藤原氏淺井長政公息女、傾心
於佛來、後薙髮染衣、而稱常高院殿、爲得今世後世
之勝果報、抽懇誠、施淨材、創建方丈、營關摠門、輪
奐改觀、實信心之所致也、夫寺院有關門者、令戒持
修道之人居之、而出得入得者、要使得之三解脫、其
三解脫者、所謂法空、無相無作也、釋論曰空者是萬
法所歸也、無相者是法住法位、世間相常住、無作者
諸惡莫作、衆善奉行、出入者得如此大解脫、況於造
建之人乎、祝關解脫門戶作不壞乾坤
大檀那常高寺殿松岩榮昌尼大姉
寛永七上章敦牂南呂彼岸日
三住妙心嶺南叟崇六書焉
大工　藤原吉次

槐堂禪師　禪師名ハ周虎字ハ槐堂、若狹國小濱ノ人、
俗姓細野氏鄕ノ地藏院ニ入テ薙髮ス、雲居師ニ從テ
禪ヲ學ブ、雲居師柱杖子與我ノ語ヲ以テ、衆弟子ニ
問フ、禪師答ルニ猛虎銜蛾眉之語ヲ以テス、雲居師
賞嘆シテ、虎ノ字ヲ賞テ與フ、因テ周虎ト稱ス、尼
公ニ見ヱ、大ニ信用セラレ、遂ニ常高寺開祖タリ、
寛文元年退テ横津海ノ龍泉庵ニ閑居ス、其壁ニ題シ
テ曰、市中自有沃州山、氣舒心閑出世間、吟月眠花春
日暮、九衢塵裡不相關、
同三年正月元日衆ニ語リケラク、我命近ニアリ、汝
等宜ク看護シ玉ヘトイフニ、明ル二日衆皆遺偈ヲ乞、
暫ク默思シテ、木佛與我、一體分身、盧鑑不昧、無
僞無眞、ト書終リテ、筆ヲ投テ寂ス、年七十文化八
年勅シテ大機玄鑑禪師ト諡ルト云、

昌淸尼　昌淸尼ハ宗惠尼ノ女ナリ、水戶侯ノ姫君ニ
仕ヘシニ、母尼死スルノ後、其遺跡ヲ繼テ、淸凉院
ニ入レリ、才學アリ、和歌ヲ好ミ、源氏ヲ諳誦セリ、
昔ヲ省戯報恩ノコトアリ、自其事ヲ記セリ、其文ニ
曰

萬治二年つちのとのい、神無月十日比に、母淸凉
院におくれてあけぬ夜の心ちなから、霜月に成
ぬ、雪こぼすか如くふりつゝき、袖の氷りもいと
ゝむすぼふれがち成に、中の五日の比、夜に入て、
したしきとぶらひきましぬ、すゝめをもてり、い
かにしてといへば、雪ぶりつゝき、うえて道にて
とらへたりといふを聞て、心に思ふ、雪國の鳥る
いちくるいは、冬はうえるもことはりにこそと、
あはれにおもひ、雀をも乞ひて籠に入、つとめて
の朝はなすとて今より、籠の内に飼を置んなど、つ
ぶやきて放ちぬ、それよりや、違へず、來り拾ふ、
延寶元年の春、前栽にわし有とハ、女の童とも度々
云ひけれと、子とものてまさぐりの礫などにこそ
と思ひて氣やらざりしに、卯月七日端近く眺めし
に、雀來りぬ、石にかへりと當る音を聞て不思儀
に思ひ、飛去りし程は見せければ、わしあり、扨
はまへ〳〵有しも雀の持來しにこそと、思ひ當り、
夫より心を付て聞見侍れは、度々落す音を聞き見
侍りぬ、丑の年廿あまり四、寅の年十あまり四、ま
たの年もたえず持ち來ぬ、斯る事は昔語にも聞か
す、末の世には人賊しからぬ事となん思ふ可けれ
ど、ままのあたり、家内あたりの人も見きゝ玉ふ、
雀の持へきものに非す、たう寺のさんせんにこそ
あるらめ、鳥類の志も捨て難く、包みて靈地へ込め
ばやと思ふ、折節神宮寺櫻本勝(坊か)うちのわざ
りおはしましゝにしか〳〵のと語り侍れは、ざり
聞給ひて、古へもかゝる事は比ひ少なし、かつは
かの菩提の爲、ぼんもう經をもとめ、おくに此事
はりを記し置かば、末の世まても殘り侍らん、と
の給ひしに、かしこくそとひたてまつる物かなと
嬉しく思ひ、御經にと志し、おく書を賴まばやと

思ふに、折よく美濃國より志深き御僧、ぞくおんといふいと尊き大とこ、多田の幻住庵へおはしましぬ。もとより親しき法師に侍れは、柴の戸ぼそをとふらひ給ふ、うぞんげの心ちして、昔今の物語まめやかに、云ひ續くる、折しもふと此事を口じ出ぬ、かの御僧きゝ給ひて、いと珍らか成こと也けちえん爲に我御經書き侍らんとの給ふ、婿くも思ひ急ぎ、うすやうたきたるを調へ遣はす、ほぞなくかい給へり、まんなは目も及ひ侍らねとも、じやう石なぞのたゝすまひ、ゆふにいみじく、うべなきゝはになん、奥書を聞くにえも知らずといへぞ、うるはしくまなひたてんも、ことの葉たに有ましう有かたく、空おそろしく涙さへ、水ぐきに流れ添ふ心ちし侍りて、心にとふ志ん（本ノマヽ）くゝるくじひなく、朝夕の勤だに、おろそかなるを鳥類の我をすゝむる物ならしと、いひも習はぬ言の葉かたはらいたけれぞ、むげにもらさんも、はいなきわさなんめれば、百とせをみそぢはかりとりすてたる老の身の拙き心の内を、筆にまかせ侍るにこそ、

延寶三卯九月三日　榮昌院の内松久院凉月昌澗書

　ねすみのうつは物にわり

ねの元日に壹せん、うしの元日に同、とらの元日に同、卯の元日の夜の五ッ時分にゑん同おとす、辰の元日同、巳の元日に同、午の二日同、ひつじの元日二文、

延寶七年二月二十四寂ス年七十七

○古文書圖繪

室本麹許狀

讃岐國室本地下人等中麹商賣事先規之重書等非元量御折紙明鏡上者以其筋目不可有別儀若又有子細者可註申者也仍狀如件

永祿元六月二日　之　景花押

　王子大明神別當多寶坊

山崎宗鑑所記之興昌寺勸化帳序

敬白　特には十方檀那助成をすゝめ七寶山觀音寺興昌禪窟再興きちゑむりやうをなさんとこうまやう

右當寺は琴引八幡三所垂迹之靈地也所謂　海上（崛一開師）（當寺也）建立一尊之聖容舌泉のなかれ彌ほからか也然は上一天より下庶民にいたるまてせんかうのたなこゝろには必富譽自在のとくをわたへ給へり凡民信花曙與士民百性崇敬はなはたしき觀音たり去は道俗男女禮拜恭敬したてまつり資財を捨しかは堂舍の莊嚴巍々として如來說敎し給し七軸函藏八軸蓮花をのつからふしやうの水にひらきしゆしやうの胸臆の圓月忽翔天無際興昌は敎門七寶莊嚴之臺儼然未散之當躰にあらすや僧衆則日夜敬之當寺頭密之性相大小權實等敎以祈國家安寧後祝君臣々壽福寺名與昌次供基處不思仰亂邦成て梵閣兩度退轉せり飛僧もさんやにましはり剩いまにかはりのたうたう瞻日雨もたまらす本尊もひとへにぬれさせ玉ふ寒を堪たり就中本尊之因位を尋ぬれは中天竺淨飯大王太子まや夫人の所生云々五百塵劫却せし未中々に三身則一之成道をとなふといへぞも苦海の衆生を濟るために還而入六趣之故鄕添も經云今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子實に一代之能化四生之慈父なり隨緣應同のりしやうすでにじやうしん一轉につけ給ふ新佛像是釋迦天竺晨旦扶桑國上下萬民にいたるまで渴仰わるによつて此狀をさゝげて扣權門芳志をすゝむ（說某男）いつはゝさるむ彌よろしく天照讃にわり一紙半錢不嫌五穀爲般各所堪之於始と雖爲十方檀那再興心可成就　狀願皇風永祥佛日增輝濟度群生到於彼岸善恩にわらすや

　勸進沙彌發願之趣謹上表

琴彈八幡宮臨時祭記

　大樂坊眞　吉祥坊散花師　舞童　引八人

○左

振桙島興幸　太平樂

一頭香菊丸　十七歲　陵王

二頭菊童丸　十九歲　還城樂

三頭愛靏丸　十八歲　拔頭

後頭千靏丸　十八歲　納蘇利

○右

振桙　蘇志摩　拘鉾

一頭千代若丸　十五歲　納蘇利

二頭菊壽丸　十七歲

三頭惟千代丸　十一歲

後頭石靏丸　十二歲

一舞臺之大衆八人　安養寺賢仁　吉祥坊定仁　大德坊祐慶　安養坊良譽　寶珠院祐仁　慶琳坊良晧

寶善坊慶祐　東隣坊良全

一伶人　採桑老　大石雅樂頭重元　散手　同三郎元重

貴德　同五郎三郎宗政　同五郎兵衛尉安光　同次郎衛尉　同次郎四郎　同彌六　同五郎三郎　同次郎三郎　同彌次郎　同次郎三郎

正別當　良賢　祝師　禰任
一神人　御劍之役　藤太夫、太郎太夫、次郎衛門、
御盖之役　孫兵衛、御起兵之役　四郎兵衛、御尻
籠之役　九郎太夫、御鼻紙の役　藤太夫
一神子八人　神樂男五人　惣一　二神子　三神子
樂頭左衛門太夫
一宿居之饗殿　御供御神酒
一御輿馬一疋　相撲十七人高屋郷ヨリ
一御實櫃持二人　高屋郷役
一御輿舁口取三人、社家之神人役
一八月一日之新賀之饗膳高屋郷ヨリ
一坂本郷三ケ村ヨリ同十五日ニ饗膳アリ
一御輿丁十二人　同兩綱之神人役　次郎九郎、兵衛
次郎、衛門次郎、三郎四郎、五郎四郎、左近太郎、
次郎太郎　御法師、熊法師、辰法師
一床木持二人　五郎次郎衛門次郎　今市之間人之役
一小松原之奥濟谷ヨリ太皷持二人孫三郎
一師子首二人之内　一人高屋郷ヨリ 一人坂本郷ヨリ　彦三郎
一假屋ヨリ相撲十七人
一朝樂酒肴　作田郷ヨリ

一御輿馬一疋　作田郷ヨリ
一透流鏑馬　同相撲十七人作田郷ヨリ
一御社之沙汰三人　（九郎兵衛、五郎衛門、兵衛四郎）
一童舞六人之内　（朔歳十二、菊市歳十一、菊松歳十
三、楠法師歳十、乙鶴歳十三、楠龜歳十二）
一物之御馬鴾毛　舞手乙法師歳十三
一集物　上市下市ヨリ　一所ニ仕候
師子舞　町之三郎、太皷役　中洲之五郎左衛門、
皷之役　上市之太郎右衛門、小皷之役　上市七郎
太郎、笛之役　上市左衛門五郎、八楠之役　上市
楠法師、狂言　町之左衛門三郎
一惣集之役者之事　太皷之役　上市源四郎、小皷
之役　上市孫太郎、下市四郎左衛門、笛之役　大工
六郎左衛門與次、太皷持　上市若鶴、此外皆集手
一大念佛　假屋擶組兩組ニヨリ
一鴨堀江ヨリ御集物仕候、是モ當日アリ
一舞年行事　寶興院慶琳坊
一惣年行事　實相坊大樂坊
悉御本神事之興其沙汰令勤仕目錄之次第如件
享德元年壬申閏八月十五日

源伊豫守信之法名常要記置之者也華押

和田石塘記

讃岐豐田郡臨海之邑曰和田濱、其海曰燧洋、北抵備滋、西抵伊豫、洋々乎數千百里、目力不可極焉、若夫海若一怒、波濤如山則舟船無泊所、而往往飄忽不知其所之矣、邑人藤郁直香宮武唯與患之、乃議新築石塘、以爲泊舟之灣、請之府、府使郡司明石義慶土岐賴克齋田吉雄董其工事、三歲乃成、塘高一丈二尺基三丈六尺背三之一、其起於和田濱者、西入海中七十余丈而北折六丈、其起於姫濱者西入海中五十四丈而南折其尾與斷相對、以爲灣口、於是賈舶漁船泰然不知復有風波之險矣、其功大矣哉、藤郁宮武二子建碑請余記其事、余欣然諾之」銘曰、維石築塘、如準如繩、以之南山、不騫不崩、

安永六年丁酉春二月

圓龜府先鋒兵馬隊長原良延撰

加茂神祠澡手盤記

倭姫命曰、祭神以清淨爲先、苟不清潔、雖饑牲肥腯神不饗也、上世伊弉諾尊發潔於檍水、以立內外清淨之敎、上下從焉、故神祠必設盤盛水、以供盥者益致潔清也、讃州三野郡仁尾邑賀茂神祠、以一巨石爲盤、長一丈三尺廣九尺高四尺五寸、狀如辛螺殼、其窪處受水二石、中有一小島狀、天工之妙、怪奇絕特、觀者莫不嘆賞焉、石舊在距仁尾北二里許蔦嶋、寶曆壬申歲、仁尾人鹽田茂兵衛見而奇之、與同鄉長左衛門者相計議、欲移之廟地、募丁壯、具器械而轉之山下、誤墜海中、竟不可復得也、二人慨恨而止、茂兵衛既卒、長左衛門年七十餘、矍鑠猶能幹了、一日語廟官原敬吉以此事、欲假一言而倡鄉人以遂夙志、原生以告衆々僉諾之、乃泛船五十艘、卒夫百餘以縄繋石、隨進潮而剌船、遠近喧傳、在田耕者浮海而漁者、遊觀者往來者相聚助之、竟得致于廟前、于時寬政十二年也、廟昔在蔦嶋、後遷于今地、石亦在彼島、而今歸于廟、雖成於人力、抑亦神之所使然乎、可不謂奇哉、原生年二十餘、來學予塾中、既歸而後每歲航海訪門、二十年如一日、予感其情誼久矣、頃來請之記、義不可辭也、於是乎書

享和元年五月

備中笠岡小寺清先撰

大麻神社所藏之獅子頭（闕略）

船越八幡宮鏡佛裡書(第一圖)

讃州三乃郡三崎庄船越之八幡宮御寶前奉懸御躰之事
右意趣者爲願持大施主幼童丸部道祖松丸無病快樂壽
命長遠富貴自在諸天券屬等除災與樂福悳增長心中祈
願成就圓滿殊致精祈所如件　康正元稔乙亥十一月廿
二日大願主丸部泰家敬白(此鏡二面)
永享十二庚申年大願主阿闍梨良仙敬白八月十三日
(一鏡裏板)

右ノ鏡三面、圓形各四尺餘、表ハ銅ニテ佛像ヲウチ出セリ、初ノ如キ者二面、一ハ彌陀、一ハ勢至、今一ハ觀音ナリ、裏板ニ記ス處前ノ如シ、天霧ノ城主寄附ト云傳リ、

今按ニ續日本紀寶龜元年ノ條ニ、讃岐國三野郡ノ人、丸部豐捄ト云人見エ、又承和十五年ノ條ニ、丸部明麻呂ト云モ見エタリ、承和ヨリ康正ニ至ル六百年余ニ及ビヌレド、丸部ハ必ズ此人ナドノ裔ト聞エタリ、サレバ香川氏ノ寄附トイヘルハ誤ナルベシ、

如意福寺鰐口圖

阿波國美馬郡久保名本宮三所權現ノ社殿ニ納マレリ(經リ七寸五歩アリ圖ニ如意福寺讃州財田庄中村元應二年庚申六月日ノ銘アリ)

船積寺古瓦

延享五年戊辰六月二日積浦ノ人陶山茂兵衛是ヲ拾ヒ得タリ、天長三年午八月吉日トアリト云、

土器三種(第二圖)

い。高サ六寸○ろ。廻リ一尺六寸高サ六寸○は。高サ八寸內ニ環アリ

以上比地中村鬼上山ノ北東ノ方ナル畑中ヨリ掘出セリ

同四種

に。○は廻リ一尺三寸高サ四寸○へ。高サ八寸經リ六寸許平ニシテ今世酒ヲ入ルヽスッポント云者ニ似タリ○と。高サ九寸六歩廻リ二尺二寸五分、以土羽上山ヨリ掘出セリ

同三種

ち。高三寸廻リ一尺六寸○り。高三寸五步○ぬ。高五寸廻リ一尺

以上櫛梨神社ノ境內ヨリ掘出セリ

石棺(第三圖)

頭ノ落チ入ル程深メサ肩ノアタリタル處ヨリ下聊深クテ背ノアタル處又少シ窪メリ、長サ一丈巾二尺五寸深一尺餘厚八寸、

右多度郡生野村摺臼山ノ西ツヽキニ遠藤山ト云アリ、寛政年中村人此山ニテ石ヲ取リツルニ一ノ石棺ニ掘アタレリ、骸骨朱ニウツメタリ、何人ナルコトヲ知ラズ、又舊ノ如ク埋メタリシニ祟ルコトアリテ塚上ニ祠ヲ作リ、山ヲ遠藤トイフニヨリテ、定メテ遠藤何某ノ塚ナラントテ是ヲ藤遠靈神ト齋リ、サルヲ天保十五年甲辰四月何者ノワザニヤ、又是ヲ發ケリ、其時見ル處ヲ圖ス、此度モ又舊ノ如ク埋メリ、

獸骨　二(圖略)

長サ三尺重サ三貫五百目牛角ニテ色純黑ナリ光澤アリテ中ハ白シ

長サ二尺五寸廻リ一尺三寸重サ二貫四十目

右明和四年卯五月廿九日生里浦ノ漁夫助太夫三崎ノ社ノ戌亥ノ方海深サ六十五尋バカリナル處ニテ網ヲ引シニ懸リシナリ、是ヨリ卅年前ツカタ助太夫マダ幼カリシ時父ニ従ヒテコヽニ網ヲ下シツルニ此モノカヽリシヲ、助太夫斧モテ打碎ントセシカド、堅フシテ破レザリケレバ、怪ミツヽ海ニ投棄ス、今又カヽルヲ見ルニ、其時ウチシ斧ノ痕アリテ、前ニ得シモノナルヲ知リ、甚異シキコトニ思ヒ、官ニ聞ヘシカバ、三崎ノ社ニ納ムヘシト命アリテ爰ニ納ム、今一ハ是ト同シキモノヽ尖リタル處折タルナリ、コハ天保十年六月宮浦ノ漁夫宗八、三崎ノ御幸石ノ戌亥ノ方ニテ網ヲ引シ時得タリト云、是モ彼社ニ納メタリト云、

今按ニ山海名產圖繪ニ讃岐ノ鯛網ノ事ヲ記セル條ニ、蛇骨ト名タル物同國白濱ニ多シ、故ニマヽ此ゴチ網ニ混シ入リ、得ルコト多シト云ヘリ、

銅雀臺瓦硯　岩瀧花生

共ニ山崎宗鑑ノ所持ニテ今傳ヘテ興昌寺ニアリ、瓦硯ハ義輝將軍ノ賜フ處ト云、長七寸八步巾五寸四步厚六步餘、重サ三百八十目、質イト細カニシテ光澤アリ、表ニ殼筋アリテ瓦面ハ凡テ微塵ノ布目ツケリ文字繪樣共ニ無シ、サレド磚白地ナリシヲ、漆以テ塗タルト覺シクテ、剝タル所マヽ白ケタリ、銅雀臺ハ魏曹操建安十五年ニ建ル處ニテ、宋ノ元符三年マデ凡ソ九百餘年ヲ經タリ、元符三年又今ヲ距ルコト

七百五十年ニ及ベリ、岩畿花生高五寸餘巾四寸重六百目、水溜リ深ク聊人工ヲ加ヘズ、自然ノ奇品ナリ、宗鑑世ヲ遁レシヨリ聊カモ身ニ落ヘザリシカド、此二ノ者ハ身ヲ終ルマデ愛翫シテ離タサリシト云、

今按ニ雅遊漫錄ニ銅雀臺瓦硯ノ圖ヲ載ス、其製是ト大ニ異リテ厚サ二寸トアリ、是ニ由テ眞僞ヲ論スル人アレド、瓦ハ用フル所ニヨリ厚薄アリ、製作亦人ニヨレバ、是ヲ以テ彼ヲ疑フベキナラネド、カヽル品ハ唯古瓦ノ珍シキヲ愛ルノミ、サノミ銅雀臺ニヨリヲ論ズベキコトニハアラスカシ、

有足蛇(圖略)

天保六年七月廿四日三野郡岡本村ナル歸來山ヨリ、長サ六尺許ノ蛇アリ、出テ或家ニ入レリ、視者驚テアタリノ人ニ告ケレバ、里人馳來リ殺サントスルニ、彼蛇眼ヲ怒ラシ、口ヲ開キテ人ニ向ヒ來ル、其勢タヤスク殺スヘクモ見エザリシカバ、若者五六人連架ヲ持來リ打ントスレバ、彌怒リテ首ヲ立尾ヲ動カシテ彼若者ニ近キ來ルヲ、漸ク家ノ外ニ引出シ、前後左右ヨリ圍ミ打テ殺シテケリ、後ニヨク見レバ二ノ足アリテ龍ノ姿ニ似タリ、里人矢野順之其腸ヲ屠リ去テ乾干ニシテ家ニ藏スト云、

日月貝

雪見具一名栗具

龍眼肉

垣衣石　龜甲石

菖蒲石　楊梅石

紋二十三　群書類從四百二十四卷諸家紋帳ニ見ユ

○雜記

從四位上左少將讃岐守源賴重君　幼名元丸、水戶中納言賴房卿ノ長子、母ハ谷左之助重則ノ女、(後久昌院ト稱ス)元和八年七月朔日江戶麴町三木仁兵衛元次ノ別處ニテ生レ玉フ、故アリテ元次ノ家ニ育ヒ參リ、八歲ニナラセ玉フ時僕松田莊左衛門西岡右衛門御供ニテ上京シ玉ヒ、天龍寺門前ニ岡本莊右衛門ト云者アリ、此家ニ留リ玉ヒ慈濟院ヲ師トシテ句讀ヲ受、書ヲ習ヒ玉フ、居ルコト三年アリテ、寛永九年十一月水戶家ヨリ星野助之進三宅四郎兩人御迎ヒニ參リ江戶ニ歸ラセ玉フ、同十四年十二月二十八日水戶侯ヘ初テ御對面アリ、十七歲ニナラセ玉フ時召出サレ玉フ、時

ニ御老中ヨリ御三家ノ連枝ハ二萬石宛行ヒ玉フ、先格ナル由申上シカバ、サルコトニハ候ヘドモ今少シ大身ニ取立ベク思召玉フ旨ノ上意ニヨリ、又々評議アリテ、御家門ニ候ヘバ尾張紀伊等ハ列ニテ然ルヘク候ヘドモ、譜代ノ大名ニナシ玉フニ於テハ何萬石ト申ス限リハ是ナク候由申シ上ケレバ、譜代ニテ大身ガヨキカ、家門ニテ小身ガヨキカ、黄門ノ趣意聞來ルベシト松平伊豆守殿ヘ上意アリシカバ、即チ水戶侯ヘ其由聞ヘケレバ、兎マレ角マレ上意ニ任セマツルベシトノ玉ヒテ、何クレノ御物語ノ序ニ、隱シ子ノコト故格ハヨカラズトモ大身ノ方ヨカルベシ、小身ニテハ末々難儀ナルベシナド語リ玉ヒテ笑セ玉フ、サテ盃ナド賜ハリ、此時八十郎ト御名ヲ改メ玉ヒシガ呼出シ玉ヒ、伊豆守盃賜ハレトノ玉ヒシカバ、伊豆守殿盃捧テ扇ヲ開キ、「今は田舍に下るまし殿中にとゝまり右京大夫に膝上りて殿中に交り威勢の程こそゆゝしけれ」ト謠ヒテ舞玉ヘバ、伊豆守ガ祝ヒ玉ハル如ク右京大夫トナリ候ヘトテ甚欣バセ玉フ、サテ二日バカリアリテ御召アリ、下館ニテ五萬石賜フ、同十五年十二月朔日從五位下ニ敍シ、右京大夫ニ任ス、同廿八日將軍家光公ニ拜謁ス、同十六年七月下館ヘ入ラセ玉フ、是月十三日從四位下ニ敍シ侍從ニ任ズ、同十七年西ノ丸御造營手傳、日光御社參供奉等ノ功ニヨリ、十九年二月七萬石加ヘ賜ヒ高松ノ城ヲ賜フ、城請取ノ使トシテ水戶ノ藩臣中山市正ヲシテ來ラシム、市正城請取十二萬石ノ地ヲ撿シテ歸リ、今年五月七日江戶ヲ發セ玉ヒ、同廿八日庵治浦ニ御着アリ、夫ヨリ府城ニ入セ玉フ、明曆二年二月十五日從四位上ニ敍シ左少將ニ任ス、寛文二年正月廿六日兼讃岐守タリ、延寶元年二月十九日致仕、同三年八月廿三日薙髮シテ龍雲院源英ト稱ス、別亭ヲ龜命山ニ營リ世ヲ遁レ玉フ、元祿八年四月十二日逝去、龍雲院殿雄蓮社大譽孤峯源英大居士ト謚ス、御年七十四、　公土井大炊頭俊勝ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、寛文三年八月三日逝去皓月院ト稱ス、

從四位上少將讃岐守源賴常君　水戶中納言光國卿ノ長子、承應元年十一月廿一日小石川伊藤玄蕃ノ家ニテ生レ玉フ、幼名鶴松後吉十郎ト改メ玉フ、寛文四年二月十八日先公養フテ子トス名テ兵部ト改ム、延寶元年二月十九日封ヲ襲フ、寶永元年二月十一日致

仕、同三月四日名ヲ新五郎ト改メ玉フ、同四月三日逝去シ玉フ御年五十三、遺命ニヨリ儒臣菊池伶人ヲシテ其葬儀ヲ掌ラシム、專儒家ノ禮ニ從ヒ、日內山ニ葬リ故四位少將南嶺源節公ト諡ス、公酒井雅樂頭忠淸ノ女ヲ聘テ室トシ給フ、享保四年二月廿六日逝去本壽院ト稱ス、

從四位上中將讃岐守源賴豐君　英公ノ第三子陽書賴章君ノ第二子、延寶八年八月廿日生レ玉フ、幼名輕千代後修理又式部ト改メ玉フ、元祿元年十一月十八日　先公取テ子トシ玉フ、寶永元年二月十一日封ヲ襲フ、同二月四日從四位下ニ叙シ侍從兼讃岐守タリ、享保廿年十二月廿日逝去シ給フ御年五十六、高林院殿貞邃祉廓學了然源惠大居士ト諡ス、　公正親町右大臣實豐卿ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、寶永四年六月五日逝去栴檀院ト稱ス、

從四位下侍從修理大夫賴治君　先公ノ子幼名萬治郎、寶永八年正月五日生レ玉フ、初松平大學頭賴直ノ養子タリ、享保三年九月十八日歸リ來リテ本宗ヲ嗣玉フ、同四年十二月十八日從四位下ニ叙シ侍從修理大夫タリ、同十五年十一月二十日逝去シ玉フ御年二十、俳德院殿源了大居士ト諡ス、　今按ニ盛衰記ニ此御一代除ケリ

從四位上侍從讃岐守源賴恒君　英公ノ末男帶刀賴芳ノ子松平左近賴煕君ノ長子、享保五年六月十八日生レ玉フ、先公取テ養ヒ玉フ、同二十年二月二日封ヲ襲フ、元文四年九月十六日逝去シ玉フ、御年十九、泰岳院殿高邃祉登擧安然源懷大居士ト諡ス、室賴豐君ノ女莽光院ト稱ス、

從四位上少將讃岐守源賴珍君　水戶侯ノ支族松平大學頭賴貞君ノ第三子、正德元年五月二十日生レ玉フ、幼名帶刀、元文四年九月十四日先公養フテ子トス、同十八日封ヲ襲フ、同十二月十六日從四位下ニ叙シ侍從兼讃岐守タリ、延享三年正月七日少將ニ任ズ、明和八年七月十八日逝去シ玉フ御年六十一、白嶽院殿性邃祉明擧槐光源稷大居士ト諡ス、　公細川越中守宣紀ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、安永七年正月十三日逝去、

從四位下少將讃岐守源賴眞君　先公ノ長子幼名輕千代後右京ト改メ玉フ、寬保三年正月十一日生レ玉フ、寶曆七年十二月十八日從四位下ニ叙シ兵部太輔ニ任ス、同九月十二日兼讃岐守タリ、安永二年正月十五日左近衛權少將ニ任ス、同九年三月十日逝去シ玉フ御年三十八、瑞麟院表邃祉陰擧義僞源定大居士ト諡ス、　公紀伊大納言宗直卿ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、天明五年十月五日逝去久昌院ト稱ス、

從四位上中將讃岐守源賴起君　先公ノ第三子幼名鼎之助、延享四年六月二十三日生レ玉フ、初大久保新藏ノ養子タリ、一學ト稱ス、世子闕ルニ及テ本宗ニ歸リ玉フ、安永九年四月二十七日封ヲ襲フ、天明元年閏五月廿八日從四位下ニ叙シ左近衛少將ニ任ス、同七年六月二十二日權中將ニ轉ス、同二十五日從四位上ニ叙ス、寬政四年七月二十八日逝去シ玉フ、御年四十六、闓皐院殿源鎭公ト諡ス、　公水戶公ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、天保十一年五月六日逝去皐安院ト稱ス、

從四位上中將讃岐守源賴儀君　先公ノ弟幼名雄丸、安永四年十一月十二日生レ玉フ、寬政三年十二月十六日從四位下ニ叙シ侍從ニ任ス、同四年九月十六日封ヲ襲フ、文化四年四月十三日左近衛權少將ニ轉ス、同十四年從四位上權中將タリ、文政四年五月二十七日致仕同十二年八月二十五日逝去シ玉フ御年四十七、濟德院殿源巽公ト諡ス、　公加賀侯ノ女ヲ聘テ室トシ玉フ、寬政八年八月二十九日逝去順正院ト稱ス、

正四位下中將讃岐守源賴恕君　水戶中納言治紀卿ノ第二子幼名熊次郎後衵之助ト改ム、寬政十年六月二十二日生レ玉フ、文化十二年四月八日先公養フテ子トス、同十二月十六日從四位下ニ叙シ侍從ニ任ス、文政四年五月二十七日封ヲ襲フ、同五年六月九日左近衛少將ニ轉ス、天保八年十一月四日正四位下權中將タリ、同十三年四月六日逝去シ玉フ御年四十五、遺命ニヨリ葬儀儒家ノ禮ニ從ヒ日內山ニ葬ル、故正四位下中將南溟源恕公ト諡ス、室先公ノ女文政十二年八月二十九日逝去賢正院ト稱ス、賴儀君第五子賴胤君封ヲ襲フ是ヲ今君トス、

公料。五條榎井苗田等ノ三村ヲ公料ニナシ玉フハ、此ノ國ヲ東西ニ分チシ時打出シテ除リシ地ナリト云ヒ傳ヘリ、按ニ盛衰記ト云書ニ、讃岐拜領之節公儀被爲仰出候は、西國中國御目附心と可思召旨被仰付候よし、御城請取水戶家臣中山市正、さて讃州は小豆嶋鹽飽其外の嶋々合して、總高十七萬石餘之處

內五萬石西領殘り十二萬石餘之處、中山氏嶋々を除き、地方にて十二萬石打請候而請取候由云々見エタリ、サレバ西讃五萬石ヲ除キ東ヨリ西ヘ打來リ、十二萬石ノ外ニ此三村殘リシナリ、カレ代官モ寛永十九年始テ置レシナレバ此時ヨリノコトナルコトシラレタリ、右ノ村々高都テ二千二百八十九石三斗七升一合、內七百二十六石五斗六升三合板井村、六百六十八石六斗六升六合五條村、八百四十四石六斗二升四合苗田村（三百九十石三斗五升二合東但、四百五十四石一斗一升三合西組。）外ニ五十石一升八合五毛村（今萬農池アル邊也）右ノ村々都テ今モ池御料トイヘリ、ソハイカナル由ニヤ、但シ當時此池ヲ造リ修ムル料ニ置レシ地ニヤ、今ハ水掛リ三萬五千八百十四石二斗ノ村々ヨリ用費ヲ出シテ、役夫ハ東西ヲイハズ國內ノ民ヲ役テ、造リ修ムト云、

相傳フ當時治所苗田村ニアリテ、今モ其處ニ守屋鋪ト云田ノ字殘レリ、守屋氏父子相嗣テ代官職タリシニ故アリテ江戶ニ召返サレヌ、其後治處ハイカヾアリケン詳ナラズ、サテ後ハ備中國笠岡同國倉敷但波國生野等ノ治處ヨリ領リ玉ヒ、又高松公　松山公等ノ兼領リ玉フ時モアリト云、

守屋與三兵衛　寛永十九年ヨリ元祿二年ニ至ル」　守屋助之進　元祿二年ヨリ同三年ニ至ル」　後藤覺右衛門　元祿三年ヨリ同五年ニ至ル」　平岡吉左衛門　元祿五年ヨリ同九年ニ至ル」　山本與總左衛門　元祿九年ヨリ同十四年ニ至ル」　遠藤新兵衛　元祿十四年ヨリ寶永十四年ニ至ル、是歲ヨリ正德三年ニ至ルマデ高松公兼領玉フ」　髙谷太郎兵衛　正德三年ヨリ享保四年ニ至ル」　櫻井孫兵衛　享保三年」　鈴木運八郎　佐藤甚右衛門　享保三年ヨリ同四年ニ至ル」　齋藤喜太郎　室田金左衛門　享保四年ヨリ同五年ニ至ル」　間宮三郎左衛門　享保五年ヨリ同六年ニ至ル、今歲ヨリ元文四年ニ至ルマデ高松公兼領リ玉フ」　千種清右衛門　元文四年ヨリ寶曆三年ニ至ル」　稻垣藤左衛門　寶曆三年ヨリ同六年ニ至ル」　淺井作右衛門　寶曆六年ヨリ明和二年ニ至ル」　內方鐵五郎　明和二年　平岡彥兵衛　竹垣莊藏　明和二年ヨリ同三年ニ至ル、今歲ヨリ備中笠岡ノ治所ニ屬リ」　渡邊半十郎　明和三年ヨリ同五年ニ至ル」　平岡彥兵衛　野村彥右衛門　明和五年ヨリ同七年ニ至ル」　萬年七郎右衛門　明和七年」　野村彥右衛門　明和七年ヨリ安永七年ニ至ル」　武島左膳　安永七年ヨリ同九年ニ至ル、今歲ヨリ備中倉敷ノ治處ニ屬リ」　守屋彌總右衛門　安永九年ヨリ天明四年ニ至ル」　萬年七郎右衛門　天明四年ヨリ同六年ニ至ル」　武島左膳　天明六年ヨリ同七年ニ至ル」　早川八郎左衛門　鐵笂之助　天明七年ヨリ同八年ニ至ル」　菅谷彌五郎　天明八年ヨリ寬政二年ニ至ル」　野口辰之助　寬政二年ヨリ同九年ニ至ル」　柘植五郎左衛門　寬政九年ヨリ享和二年ニ至ル」　三河口太忠　享和三年ヨリ文化三年ニ至ル」　大岡久之亟　大原四郎右衛門　大草太郎右馬　文化三年ヨリ文政十年ニ至ル、今歲ヨリ大草太郎右馬息太郎左衛門父子連名加判ニテ同十三年ニ至ル、今歲ヨリ但波國生野ノ治處ニ屬リ」　川崎平右衛門　文政十二年ヨリ同十三年ニ至ル、今歲ヨリ天保十年ニ至ルマデ伊豫國松山公兼領リ玉フ」　高山又藏　天保十年ヨリ同十三年ニ至ル、是ヨリ又倉舖ニ屬リ」　勝方彥市郎　天保十三年ヨリ喜永三年ニ至ル」　佐々井半十郎　嘉永三年ヨリ今ニ至レリ

淚艸　松壽院ト聞エシハ、故忠高君ノ御女ニテオイト絶レ玉ヒ、歌ヨミ文カクコトヲモ好マセ玉ヘド、ツヽミ深キ御方ニテ、世ニハサシモ知レ玉ハザリケリ、多賀常良ニ賜ヒテ室トナシ玉ヒ、男子一人生玉ヒシガ、其年夫君身罷玉ヒ、松壽院此御子ヲ似ナキ者ニモテカシヅキ玉ヒシガ、六歲ニナリ玉フ年、高和君御養子ニナシ玉フベク命アリケリ、サルハ今ヨリ世子出來ナバ幕府ニ請フ公ニ仕ヘシメンノ下心トゾ聞エシ、松壽院イト忝クウレシキコトニハ思ヘレド、又一ツニハ夫君ニ別レシ後ハ此御子ヲ朝夕サラズナグサメグサニハグヽミ玉フヲ、今更御許ヲ離シ玉ハンハイト本意ナク悲シキヿニ思ヒ玉ヒテ、此御子生レ玉ヒシヨリ此命アリテ江戶ニ召シ玉フマデノコトヲ述玉ヒテ淚艸ト云書ヲカヽセ玉フ、事長ケレバソガ中ニアリシ歌ドモ今聊コヽニ載セ侍ル、夫君におくれ玉ひて後をりにふれてよみ出し玉へるうた「歎わび見しは夢かと思へどもさむるうつゝのなきぞ悲しき」「よそに見しを花か露も此秋は我袖よりぞこ

はれそめける」「夕暮の空にたゝよふ浮雲やはかなき人のゆくへなるらむ」「さらてたに秋の夕は悲しきになき人戀るよもきふのやど」「朝露のきえし形見とおもふにも何むつましき大和撫子」

御子三歳にならせ給ふ時、髮置

「萬世をかけてそ結ふむらさきはつもとゆひになりきためしを」

はかまき

「千とせふるよはひも兼て見ゆる哉けふたち初る鶴の毛衣」

御子召れ玉ひて江戸にくたり玉ふ時別をゝしみて

「小車のめぐりあふせもたのまれす我玉の緒の限りしらねは」「諸共に行へき身にもあらなくに涙はかりや先にたつらむ」

江戸につかせ玉ふ又の年の春

「あら玉の年立日より戀しきはふるすを出し鶯のこゑ」「思ひやる心つかひは東路に日にいく度か行かへるらむ」「武藏野やみとりをこえて若草の萠出る春の程を床しき」

おくりまつりし人々歸りきて、くたり給ひし時の道すから、いかめしかりけることなど、かたりけるを聞玉ひて、わかれ玉ふをりのことを、思ひやられ給ふなど云給ひて、

「わすれしよ此世の外になりぬともわりて別れし人の面影」「立わかれ又もみぬめの浦浪にぬるゝ袂のかわくまそなき」「いつこえてあふ坂山の岩淸水わりてわかれしかけをみるへき」

さてこの文の末にちゝのはかなくなりたまひしありさまよりはしめて、あやしき筆の任につゝりかきて、我なからんあとの形見にも見せ奉らはや、人のかたみにははかなき筆の任にましたるものなしなどかゝせ給ひて、

「思ひ川岩まによどむ水くきをかき流すにも袖はぬれけり」「をさゝ原露のきえなむ夕にも此一ふしは思ひおかまし」「木のもとにかきあつめたる言の葉をはゝその杜のかたみとは見よ」

多賀兄弟復讐

多賀孫兵衛ハ大坂慶長ノ役ニ戰功アリテ頗武勇ノ譽アル者ナリシガ、友等ニ內藤八左衛門ト云者アリ、交リ厚キマヽニ或時八左衛門カ心得違ノコトアリシヲ諫メシカバ、八左衛門面ニハ從ヒシ体ニテ是ヲ怨ムル心アリ、一日孫兵衛ヲ招キ酒ヲ進メ互ニ醉ヲ盡ス程ニ、其席ニテ醉臥タルヲ八左衛門一擊ニシテ死骸ヲ薦ニ包ミ、天神脇ノ蓮池ニ投棄、行方シレズ立去リヌ、孫兵衛ノ弟ニ孫左衛門、忠太夫ト云二人アリ、此時兄ハ十四歲弟ハ十二歲ナリシガ、兄ノ讐ヲ報ントテ竊ニ國ヲ出、國々ニ由緒ヲ求メテ尋ネアリキシ程ニ、八左衛門小笠原家ニ仕ヘシ由聞エシカバ小倉ニ趣彼ガコトヲ尋ヌルニ、江戸常府ノ由聞テ即チ江戸ニ徃尋ネ求ムル所、三田茂左衛門ノ嫡子右衛門三郎ト云ハ孫兵衛ノ甥ニテ、孫兵衛殺サレシ時ハ僅ニ五歲ニテカヽル由モ知ラザリシニ、年長テ此事ヲ聞、何卒八左衛門ニ尋ネ逢ント窺ヒ居タリ、又市太夫トテ孫兵衛ノ烏帽子アリ、今ハ松平伊賀守殿ニ仕ヘ居タリシガ、孫兵衛恩顧ノ者ニテ是モ此事ヲ心ニカケケルニ折シモ、二人者多賀兄弟ニ出會諸共ニ本意ヲ遂ント語リケレバ、兄弟固ク辭テ心底ノ程ハ感心ニ候ヘトモ此仇ハ我等兄弟ニ任セ玉フベシトイヘバ、市太夫申スヤウハ我命ハ兼テ恩顧ノ人ニ對ヒ惜ミ申ス譯ナシ、強テ辭ミ玉ハヽ只今自殺シテ心底ノ程ヲ見セ申サント云ニ、サアラバ其場ニ向ヒ立玉フベシ、サレド二人ノ命アラン限リハ助力ハユルシ玉ハレトテ、四人共ニ心ヲ一ニシテ仇ノ在所ヲ求ムルニ、市太夫商人姿ニナリ小笠原殿ノ屋舖ニ立入色々尋求ムルニ、小石川ナル屋舖ノ表長屋ニ住ルト聞テ其容貌ヲ慥ニ見知リ、サテ多賀兄弟ニ知サントスル處、一日小笠原殿ノ門前ニ貴馬アリ、八左衛門モ見物ニ出タリシヲ、市太夫多賀兄弟右衛門三郎等ニ告テ是ヲ見セケルニ、兄弟ノ者即テ討ントイヒケレバ、爰ハ殿ノ門前ナリ、尙折モアルベシト堅ク制メテ其日ハ歸リケリ、寬永十八年四月十一日八左衛門神田橋ノ土井殿ノ屋舖ヘ事アリテ行ケルヲ、市太夫見付急キ多賀兄弟右衛門三郎ニ告知セ、四人共ニ彼アタリヲ行メグリテ相待處、八左衛門彼屋舖ヲ出、馬ニ乘上下十二人召連歸リケルヲ、四人ノ者サアラヌ体ニテ待カケタリ、町ノ幅モ狹キ處ナレバ四人兩方ヘ立別レ、馬ノ左右ヨリ行向ヒ間近ナレバ編笠ヲ後ヘ投棄、孫左衛門聲ヲカケ、兄ノ仇內藤八左衛門トコソ見ユレト眞先ニ一刀擊カヽルヲ右ノ方ヘカハシケレバ、忠太是モアリト頭ヨリ耳際カケテ切付レバ、右ノ方ヘドウト落ルヲ孫左衛門續テ

二ノ太刀切付シガ、思ヒコンダル勢ニ其マヽ倒レテ息絶ケリ、右衛門三郎市太夫ハ見合セ居タルガ、八左衛門ガ下人兄弟二人ニ扱合セ散々ニ打鬪フ、右衛門三郎市太夫モ諸共ニ入交リ相戰フ、町屋ノ者皆戸ヲ閉テ一人モ出ズ、町口或ニ陛ナドヨリゾ見タリケル、己ノ刻ヨリ午刻マデノ戰ヒニ下人十二人一人モ逃ル者ナク戰ヒシニ、若黨一人討レ臥タルガ起アガリ鎗ニテ孫左衛門ニ突カヽル、孫左衛門常ニ入身ヲ得タレトモ數ケ所ノ手ヲ負殊ニ右手ニ叶ハズ、左手ニ太刀ヲ持テ入込ケルニ、左ノ袖ヨリ右ノ肩先ニ突通サレ、鎗負ナガラ壁土ヲ干リタル中ニ倒レタリ、其若黨又刀ヲ扱テ右衛門三郎ノ後ヨリ斬カヽル、右衛門三郎彼下人二人ト切結ヒシガ、二人共ニ肩ヨリ乳ノ上マデ切込、其刀取直シ後ニ向テ若黨ヲ切拂ントスル處、二人ノ者フミ込右衛門三郎ガ刀ノ柄ニ切付シカバ、指切レテ力ナク引退ク處、忠太夫大音ニテ一人モヤルマジト馳寄テ切拂フニ皆散々ニ逃去リヌ、右衛門三郎孫左衛門ガ壁土ノ中ニアルヲ見テ、今ハ是非ナキコトカナトイヘバ、未タ死ナヌゾトテ枕木ニ取付起上リ、各〻ハ手ハ負玉ハヌカ、十九年ノ間朝夕心ヲ盡セシ本意モ今日ゴソ遂候ヘ、忠太夫右ノ書付ハイカニナド問テアヽ目ガマフト云ニ、忠太夫右衛門三郎ニ氣付ハナキヤトイヘバ、右衛門三郎印籠ヲアケントスルニ指切レテ叶ハズ、孫左衛門我腰ニモアルベシトイフニ探リ見レバ切落サレタリ、サアラバ水一口ト云フニ、忠太夫手負ニ水ハ禁物ナリトイヘバ、打笑フテ誠ニコソヨレ今求メ玉ハレト云ニ、市太夫町屋ニ入リアリアフ茶椀ニ水モテ來リ、顏ニモ洒キ口ニモ呑シケレバ即テ倒レテ息絶ヌ、行年三十三トゾ聞エシ、忠太夫抱起シテ見レバ淺手深手十九處アリ、忠太夫腰ニ二處右手ノ中指小指切ラレ無名指二ツニ破レタリ、市太夫七處手負ヘリ、八左衛門ノ下人一人ハ其場ニテ倒レ、四人ハ道ニテ倒レ死タリ、サテ此由訴ヘケレバ御旗本數多來リ玉ヒ、神妙ノコトナリトテ、近藤織部殿ノ屋鋪近キアタリナレバ是ヘ案内シ玉ヒ、門内ニ疊ヲシカセ四人ノ術者ヲ置、何角御尋ナドアリ、時ニ御旗本田附四郎兵衛殿ハ右衛門三郎ノ從弟ナル由ニヨリ、多賀兄弟右衛門三郎等三人是方ヘ、市太夫ハ大久保彥左衛門殿ヘ各御預ニナリ、其夜六ツ時引取ケルニ、送リノ

人彼是二百人ニ及ヘリ、サテ其後何ノ沙汰モナカリシガ、此秋ノ末ツカタ田附殿松平伊豆守殿ニ右ノ預リ人ハ如何仕ント申シケレバ、伊豆守殿打笑ヒ給ヒテ此者共ノコト佛祖口傳ノ處ナリトノ玉フニ、即テ御請申上其マヽ皆ユルサレシトナム、孫左衛門ハ身長六尺ニ及フ程ノ大男ニテ、力人ニ絶レタリ、積重ネタル俵ヲ望ノマヽ片手ニテ扱出シ又術ノ如クサシスレ、二人持ノ鐵鉋ヲ膝ノ上ニテ放シナドセシ程ニテ、文事モ能ク心カケテ手ヲ善書ケリ、老母アリ若狹ヨリ出雲ニ移リテ居リシガ、江戸ニ趣ク時近江ノ高嶋ナル姉婿ノ方ニ留メ置、我等兄弟江戸ニ奉公ノ望アリ在付タランニハ速ニ迎ヘマツルベシトテ別レケリ、其時短冊ニ一首ノ歌ヲ書テ殘シ置ケリ、「忘られしな忍ふの山の夕時雨心のおくに染るもみち葉」忠太夫ハ身長兄ヨリ高ク、武事ハサラニ學ヲ好ミ書ヲ善セリ、鐵鉋ハ田附殿ノ弟子ニテ頗ル名ヲ得タリ、右衛門三郎ハ年二十三ニテ容貌又人ニスグレ」頗ル威望アリテ武事ヲ鍛錬セリ、十三歲ノ時若狹ヨリ出雲ヘ移ラセ給フ時、路ニテ家來二人欠落シケルヲ見付、怒テ制シケレバ二人威ニ畏テ服從ス、市太夫姓氏闕モ才智人ニ過レタル者ニテ諸藝ニ達シ、和歌幷ニ書ヲ能セリト云、

村名考　今按ニ古ハ國、縣、村或ハ里等イヒテ郡鄕村ナド、際々シキ定メハナカリシナリ、國ト云モ、吉野國、初瀨國、印南國ナドイヒテ定リタルコトナシ、國造本紀ニ百四十四國ノ國造ヲ擧タルニテ知ルベシ、縣ハ今郡ト云ニ似タルコトナガラ、是ハ國造ニ賜ヘル地ノ外ニ、公ノ料ニナシ給フ處ヲイヘルニテ、今ノ世ニ稱フ御料ナリ、サルヲ何縣某縣ナド云ハ、譬ハ松浦ト云處ノ、公ノ料ナリシヲ、松浦縣ト稱ガ如シ、村ハ家居群カレル處ヲ云フニテ、家居ナキ處ハ、村トハイハズ、譬ハ昔野原ニテアリシ時ハ、大野原トノミ云シヲ、家居出來テ、大野原村ト云ルガ如シ、是モ上代ヨリアリシ名ニテ、神代紀ニモ、天村君ト云コト見エ、崇神紀ニ、茅渟縣陶邑、景行紀ニ八代縣豊村ナドアリ、郡ハ新井氏ノ說ノ如ク、韓語ヨリ出タルニテ、本皇國ノ語ニアラザルヲ孝德天皇ノ御世ヨリ、國ニ郡ト云ヲ建テ、鄕ヲ統シメ給フヨリ、出來レルナリ、サレド其名ハ尙昔ヨリ

アリシ地ノ名ヲ取テ名ケシニテ、イハヤ印南國ト云シヲ印南郡トシ、松浦縣ヲ松浦郡トセシ類ナリ、尙鄕名ヲ取タルモ多カリ、又ハ伊豫國神野郡ヲ新居郡ト改メシナドニテ、他モ准ヘ知ルベシ、鄕モ此御世ニ二十五家ヲ一鄕ト定メ給ヒシナレド、其名ハ尙舊クヨリ、何村何里ナド云シヲ取テ付ラレシナリ、サルニ郡鄕ノ名、後世ニ付タルハヲサ〱ナキヲ、村名ハ後ニ得タルモ處ニヨリテハナキニ非ズ、サテ郡鄕ノ名義ハ、舊ク傳ヘタル說ドモニ、愚考ヲ加ヘテ、既ニ記シヌレド、村ノ名義ハ云傳ヘノアルヲノミ擧ツレバ、今ソレニ洩レタルヲ聊考得テコヽニ載ス、

土居　土器村ニ續キタレバ、土器作リノ居タリシ故、得タル名カトモ思ヘド、サニ非ズ、彼是ノ村ニ土居ト云小地名ノ多カルヲ思フニ、後世土ヲ築キテ屛ヲ作リタルヲ土居構トイヘレバ、當時サルモノアリシニヨリ、其處ヲサシテ云シガ、後村ノ名トハナレルナルベシ、

津森　今津　森ハ借字ニテ守ナルベシ、昔此アタリ舟ノ泊シ處ニテ、津ノ守ヲ置カレシ故、名ケシナラン、越前國敦賀郡、津守鄕アルニテシラレタリ、隣村今津ト云ガアルモ、今ハ新ノ字ヲ伊麻ト訓ルニ同義ニテ新ニ出來ル津故、得タル名ナリ、

田村　山城國葛野郡、上野國勢多郡、丹後國熊野郡等ノ鄕ニ田邑ハ多無良トアリ、又田村トモ書リ、只字ノマヽニ田方多カル故得タル名カ、又屯ノ義ニテ古ヘ軍團ナド置レシ處ニヤ、

買田　宮田　買ハ借字ニテ峽ナリ、山ト山トノ間ヲ峽ト云、祝詞ニ大峽小峽ナドアル是ナリ、此地山村ニテ峽ナル田ト云義ナルベシ、今與北村ニ峽田池ト云ガアルモ、山ノ間ニアル故、名ニ負シナリ、宮田ハ昔神田ナドニテアリシナルベシ、

追上　大口　追上ハ嶮山坂ナドアリテ、荷ナド背負テ上リシ故、オヘル名カ又追分ト云地名ノ餘國ニ彼是アルヲ思フニ、阿ト和トハ近ク通フ音ナレバ、追分ヲ訛リシニヤ、追ハ追及ナドノ追ニテ、相逐來ル人ノ、左右ニ分ル處故、得タル名ト聞エタリ、大口ハ大山ノ口故名ケシナルベシ、

帆山　新目　帆ハ秀ノ義ニテ、高ク秀テタル山ノアル故名ケシナルベシ、三代物語ニハ骨山トアリ、是ナラバ秀峰山ニテイト能聞エタリ、新目ハ新居ヲ爾比

乃美ト云ガ如ク、目ハ美ト常ニ通フ音ナレバ舊ハ爾比乃美ト云ヒシガ、字音ニナリシニテ新宮家ナラント、思ヒタリシカド、尙ヨク思フニ、目ハ名ト云ニ同義ニテ、隣リナル本目村ヨリ、別レタル村故、本村新村ノ義ナルベシ、村ヲ名ト云コト、舊ハ聞エネド、後世某村ト云ベキヲ、某名トモイヘリ、長尾名、久保名ナドノ類ナリ、サテ村長ヲ名主ト云モ、是ヨリ出タリ、又三野郡ナル新名村モ、高瀨ヨリ別レタルナレバ、是ト同シ義ナリ、サルヲ後世名ト云ニ、又村ノ字ヲ添シナルベシ、

稻木　倭名鈔ニ、尾張國丹羽郡稻木ハ、以奈木トアリ、古書多ク木ヲ置ト作リ、宣長云古別直稻置ナド云ハ、西土ニ諸侯ト云中ニ、公侯伯子男ナド云差アルガ如ク國造中ニカヽル差等アリシナリ、稻置ハ郞君ト云意ニテ、親ミ尊ミテ稱ルガ、即テ其地ヲ領ル人ノ官名トナレルナリ、此村古稻置ノ居給ヒシニヨリ得タル名ナリ、尙諸國ノ鄕名ニ彼是多カリ、

山階（附兵田）　萬葉集卷十三ニ、師名立都久麻左野方ノ註ニ級立る物は斜に片はへなる意にて、片とはつゞくるならむ、山城國の山階てふ處も、坂路によりて階といひ、越の國に科坂在てふ冠辭の有も、嶮き愛發の坂などの階立る故とおぼし、是等をむかへ見よと、眞淵イヘリ、コヽノ山階モ雨霧山ノ麓ナレバ、シカ名ヲ得タルカ、又神名式ニ山城國宇治郡山科神社二座、並大月次新嘗ト見ユ、此神社ノ神戸ニテアリシ故オヘルカ、イヅレニモアルベシ、因ニ云、此村ニ兵田ト云地アリ、延喜式諸國兵田ノ條ニ、當國ノコトハ見エネド、當時置レシ處ト見エテ、此名殘レリ、

莊村　莊ノ字多止古呂ト訓リ、サレバ後ニ字音ニ類レシニテ、臣連伴造等ニ賜ヘル粮地ニテアリシ故負ルナルベシ、

桑多　或書ニ堀江村ノ舊名ヲ桑多ト云リトアリ、今道隆寺ヲ桑多山ト云ルヲ思フニ、加茂堀江トモニ桑多トイヘリシヲ、加茂ハ賀茂神社ノ神戸トナリシヨリ、賀茂ト呼來リ、堀江ハ海濱ナル故小地名ヲ堀江ト云シガ村ノ名トナリテ、桑多ノ名形モナクナリシナラン、雄略紀ニ、十六年七月詔ニ宜レ桑國縣殖レ桑、ト見エテ通證ニ、考ニ倭名鈔ニ諸國郡鄕名、桑原者居レ多、此其遺也トアリ、當時桑ヲ殖ラレシニヨ

リ得タル名ナルベシ、多ハ田ナリ、丹波國ノ郡名ニ桑田トアルニテモ知ベシ、此他郷名ニモ彼是アリ、サルヲ道隆寺縁起ニ、多ヲオホキコトニ思ヒテ、和氣善茂ガ千本ノ桑ヲ殖ラレシニヨルナドアルハ、例ノ信カタキコトトモナリ

大見　大見ハ大海ナルベシ、サレド滄海ナド云義ニ非ズ、古江ヲモウミトイヘレバ、只廣キ入江ナリシ故、カク呼ルナラン、今吉津村ニ濱ノ江ナド今地名アルヲ思フニ、松崎ヨリ下高瀬アタリヲカケテ、廣キ入江ニテアリシニモヤアラン、

佐股　此村昔麻村ヨリ分レタルニテ、今モ上麻下麻ト共ニ三麻トヨベリ、サレバ麻ノ枝村サルニ因リ、麻股ノ義ニヤ又此地山ノ間ニアリテ、狹ク長キ村ナレバ、狹間田ノ義ナルヲ、カク二字ニ約メテ書ルニヤトモ思ハル、ナリ、

羽方　鳥ノ翼ニ地形似タルニヨリ負ル名ト云人アレド、コハ字ニ泥ミタル説ナラン、思フニ羽ハ端ノ義ニテ山ノ端方ナル故名ケシカ、又羽ハ畑ヲ略キタルニテ、畑方ノ義ニモヤ、

仁保　保ノ字、尾ヲカケレド、是ハ必ス保ナルベシ、倭名鈔ニ近江國、野洲郡邇保、相模國高座郡ニ寳トアルニテ知ラレタリ、名義ハ未思ヒ得ズ、試ニイハヾ、近江ノ湖ヲ仁保ノ海トモイヘルハ、鸊鷉鳥ニヨリタルニテ、癸モサル由ニヤ、又思フニ保ト云ハ孝德紀ニ戸皆五家相保、元明紀ニ五保知而不レ告者、拾芥鈔ニ坊七十二坊、保三百保ナドアル保ニテ、今ノ世ニ組ト云ニ同クテ、何保某保トイヒシガ、後ニハ村ト云ガ如クナリシモアリ、東鑑ニ莊園郷保ノ地頭ト云コト見エ、又丹後國伊稱保、陸奥國平泉保ナドアリ、是等全ク村ト云ニ同シ、因テ思フニ今此村ノ枝村ニ曾保ト云アリ、是ハ海邊ナレバ、磯保ノ義ニテ名ケシニヤアラン、是レ保ト名ケシ本ニテ、癸ヨリ分レル保故、新保ト云シガ、ヤガテ此地廣クナリシマヽニ曾保ハ却テ此村ニ屬リシナラン、今モ郷名ノ小地名ニ殘リテ、村名ノミ世ニ聞エタルガアル類ナリ、サテ新保ナラント思フニ、出雲國仁多郡ハ倭名鈔ニ爾伊多トアリ、此伊ハ仁ノ音ノ響ニ添タルナレド、名義ハ新田ナラント思ハル、ナリ、

生里附與女穴　生里ハ、ハノ濁音マニ通フハ常ノコトニテ、奈婆里ナルベシ、倭名鈔ニ伊賀國名張郡名張鄕アリ、是ヲ天武紀ニハ隱郡ト見エ、萬葉集ニ吉隱トアリ、名義ハ天武紀萬葉集等ニ隱ノ字ヲ用ヒシ如ク、山ナドノ廻リテ隱リタル故得タル名ナリ、此地モカタヘハ海ニテ、外ハ皆山ノ廻リテ隱リタレバ、名ケシナルベシ、因ニ云、コヽニ與女穴ト云岩窟アリ、此名ノカク殘レルコト、甚ユカシクナン、試ニ思ヒ得タルコトアリ、古事記ニ於是欲レ相二見其妹伊邪那美命一、追二往黄泉國一トアル黄泉ノ字祝詞式、萬葉集ナドニハ夜見トモアリテ、與女ハ夜見ノ轉リタルナリ、サテ出雲國風土記ニハ、伯耆國郡内、夜見島、又出雲郡宇賀鄕、北海濱有レ礒、自レ礒有二窟戸一、高廣各六尺許、窟内有レ穴、人不レ得レ入、不レ知二深淺一也、夢至二此礒窟之邊一者必死、故俗人自レ古至レ今號二土黄泉之坂、黄泉之穴一也、ナドアルヲ熟思ヒ廻スニ、神代ニハ死体ヲ人ニ見スルヲ、痛ク忌々シキコトニ思ヒ給ヒシト見エテ、神代紀ニモ伊弉册尊ノ崩御給ヒシ時、伊弉諾尊ノ追來リテ見給セシヲ、恥恨ミ給フコト見ユ、是ハ幽冥ニ深キ理アリテ、死體ハ殊ニ隱シ給フナリ、其隱ノ穴ヲサシテ黄泉國トモ、黄泉穴トモイヘリ、サルハ幽冥ノ理ヲ知リ給フウヘニテハ、命數ハ本ヨリ知リ給ヘバ、病厚クナリテ、今一期ト思フヲリ至レバ、兼テ作リ拵ヘシ、岩窟ニ入テ即チソコニテ死リシヲ、黄泉ノ國ニ行トハイヘリ、伊弉諾尊ノ隱宮ヲ淡路國ニ構リテ、寂然長隱者矣トアルモ、天照大神ノ天磐窟ニ隱リ給フモ、皆黄泉穴ニ入リ給フト同義ト聞ユルナリ、故ニ神代紀ニ葬ノコトヲ記セルハ天稚彦ノミニテ、此外ニ伊弉册尊ヲ葬二於紀伊國熊野之有馬村一、天津彦火々瓊々杵尊崩、葬二于筑紫日向可愛之山陵一、ナドモアレド、コハ後ヨリ推量書ルニテ、實ハ今ノ如ク御葬リノ儀ヲ行ヒタルニハアラズ、サテ素戔嗚尊ハ居二熊成峰一而遂入二於根國一者矣、又事代主命於二海中一造二八重蒼柴籬一、蹈二船枻一而避之、少彦名命至二常世鄕一矣、大巳貴命躬被二瑞之八坂瓊一而長隱者矣、ナド思フニ、外ノ神等モ皆カク御體ハ隱シ給ヒケンヲ、尚神代ノコトハサラニ、人ノ世トナリテモ、幽冥ヲ得給フ人ハ、皆カクゾアリケラシ、日本武尊武内宿禰ナドノコト思ヒ合スベシ是ハ實ニ幽冥ノ理ヲ得サレバ、得シラレスコトナガラ、今人ノ家ニ畜ル牛馬犬鷄ナドノ類コソ、外ニ往テ叶ハネバ、死体ヲ見スレ、此外ナル鳥獸魚虫ノ類、總

ヲ死体ヲ見タル人ナシ、少キ虫ナドノ中ニハ、物ニ殺化モアレド、鹿狼ノ類ハイカニナリツラン、サリトテ命ノ限リナキ物ニハアラザルベシ、思フニカヽル類ノ幽冥ニ通フ物モ、今ハ限リト覺エヌレバ、サリヌベキ隱レ處求メテ、身ヲ隱スノ術アルナルベシ、人ニ殺サレ、物ニトラレナドスルハ、不意ノコトナレバ、身ヲ隱ス隙ナキカ、ハタ其術ノ行ハレヌナドナルベシ、故天稚彥ノミ葬ノコト見エタルモ、射殺サレ給ヒシ故、外ノ神等トハ異ナルニヤアラン、サテ夜見穴ハ右ニ云フ如ク、從ハ神等ノ御身ヲ隱シ給フ、窟ナルガ、後ノ世ニ至リテモ、尙古風ノマヽニ、家ニテ死リシモ、カヽル岩穴ニ葬リシニモアルベシ、萬葉集ニ人ノ死ルヲ岩隱ト詠ルモ、是故ナリカシ、今モ彼是ノ村ニ、岩穴ノ殘レルヲ見ルニ、多クハ邊鄙ニテ、人ノ家居少キ處ナリ、皆此黃泉穴ニテ、中ニハ神代ニ作レルモアルベク、又後世ニ作リタルモ多カルベシ、今ハ此夜女穴ト云名ノコヽニ假レルヲアタラシキコトニ思ヒテ、此考ヘハ擧ルニコソ、

比地　泥ノ義カ、又卑地カ、未考ヘ得ズ、神名式ニ伊賀國伊賀郡ニ比地神社大村神社、高瀨神社アリ、地形此地ノアタリト能似タリ、

山田尻　山田ハ黑淵村ノ舊名ニテ、此村其後ニアル故、得タル名ト既ニ云リシガ、山田ト云ハ、山田郡ノ條ニ云ルガ如ク、安閑天皇ノ皇后春日山田皇女ノ御名代ナリシニヨリ、名ケシナルベシ、因ニ云山田神社或此皇女ヲ祭リタルニテハナキヤ、日本書紀一本云、和珥臣日觸女、大糖娘生二一女一、是爲二山田大娘皇女一、更名赤見皇女、トアリテ神名帳ニ、近江國犬上郡山田神社、坂田郡山田神社、伊香郡赤見神社ナド見エタリ、此神社何レモ此皇女ヲ祭リシト見エナ、赤見ト云御名ノマヽニモ祭レリ、黑淵ハサル淵アリテ得タル名カ、未思ヒ得ズ、

海老濟　字ハ例ノ借タルニテ、彼魚ナ室モテトル由ノ名ニ非ス、サルヲ一說ニ此村昔丹波ト云ヒシヲ、地藏ノ海老ヲ救フコトアリツニヨリ、得タル名ナリナド云ハイミジキ僻言ナリ、思フニ惠比須ハ夷ニテ久比ハ神代紀ニ豐嚙野等ヲ、豐組トモアル如ク、組ノ義ニテ組ハ古母理ト通フ由、冠辭考ニイヘリ、サレバ夷人ナ能證レシ故ノ名ト聞エタリ、倭名鈔ニ播磨國賀茂郡夷俘鄉アリ、コハイカヾ訓ルニヤ、訓詁

ナシ、但字音マヽ唱フルニヤ、ソハトマレ意ハ夷人ノ囚俘ヲ置レシ由ノ名ト聞ユ、景行紀ニ五十一年所レ獻二神宮一蝦夷等云々、令レ安二置御諸山傍一、未レ經二幾時一悉伐二神山樹一叫二呼隣里一而脅二人民一、天皇聞之、詔二羣卿一曰、其置二神山傍之蝦夷一是本有二獸心一難レ住二中國一故隨二其情願一令レ班二邦畿之外一是今播磨讚岐伊勢安藝阿波凡五國佐伯部之祖也、ト見エタル此蝦夷ナドニヤアラン、爰ニ揖賀大明神トテ大物主命ヲ祭レル社アリ、揖賀ハ大神ヲ訛レルニテ、即三輪神ノコトナレバ、彼蝦夷等漸王化ヲ蒙リショリ、皇國風ニ心化テ、其初メアタリニ住シ程ヲ思出シテ、彼大神ヲ祭リシニモヤアラン、

田野々　內野々　田野々、內野々ト野ヲ疊リタルハ便リヨキマヽニ書ナラヘルニテ、田之野內之野ノ義ナルベシ、

和田　和田ハ海邊ナレバ、海ノ義ニテ、攝津國ナル和田崎ナドト同ジ義ナラント思ヒタリシカド、綾郡山田鄉ノ小地名ニ、南和田、中和田、下和田、ト云アリ、コハ山里ナレバ、イカヾアラン、又甲斐國大住郡和田、近江國高島郡和田ナドアリ、是等海ナキ國ナリ、因テ今試ニ、思ヒ得タルハ、和泉國大鳥郡和田ハ、倭名鈔ニ爾木多ト註セリ、サレバ爰ナルモ當時爾木多ト唱ヘツランヲ、後今ノ如ク和ヲ字音ニ唱ヘシニヤ、萬葉集卷二ニ、人麿ノ石見國ニテ詠ル歌ニ和多豆乃荒磯乃上爾、トアルヲ或本ニ柔田津トモアレハ爾木多ナルコト疑ナキヲ、宣長ハ或本ノ柔田ハ和田ヲ爾木多トヨミ誤レルニ付テ、出來ル本トシテ、石見國那珂郡ノ海邊ニ渡津村アリ、コヽナルベシト云リ、サレド是モ猶爾木多津ナルガ、後渡津トナリシモ知リ難シ、名ノ義ハ齊明紀ニ伊豫國ノ熟田津ヲ、熟田津此云二爾枳多豆一、又萬葉集ニ、熟田津爾船乘世武登、ナドアル此字ノ義ナルベシ、

福田　東鑑ニ福田料田ナド云コト見ユ、是ハ追福ノ爲ニ緣アル寺ニ寄附セシ田ナリ、サレバ當時サル由アリテ得タル名カ、又顯宗紀ニ三年四月戊辰、置二福草部一、トアリテ鄉名ニ福草(三枝トモカケリ)ト云地アルヲ思フニ、福草田トアリシヲ、草ヲ省キテ福ヲ字音ニ唱ヘ來リシニヤ、

河內　此地ノ氏神ヲ三部明神トテ、天津彥根命ヲ祭ルト云リ、三部トハ此神凡河內直、山代直等祖又茨城

國造額田部連等祖ナド神代紀ニ見エタレバ、河内直山代直、額田部等ノ三部ノ祖ナル故、稱來御名ト聞エタリ、ソガ中ニ河内直ノ緣アリテ、爰ニ祭リタルニヤ、地ノ名ヲモ田チカクヨベルニヤ、

有木　有ハ借字ニテ荒木、又ハ荒岸ノ義ナルベシ、荒ヲ阿里ト云ハ、雄略天皇御歌ニ荒丘ヲ阿里裘ト詠給ヘリ、ハ羽床善通寺ノ村ニ在岡ト云地アリ、荒岡ノ義ナリ、又荒磯ヲ阿里肖トモ詠メリ、岸ヲ幾ト云ハ田岸ヲ多乃幾ト云例ナリ、

讚岐公系圖　神櫛王、(景行天皇第十七皇子母五十河媛)千麻命、能麻命、油良大人、阪根麻呂、笠麻呂、小櫛麻呂、海麻呂、浦大人、自是系圖散漫而不分明、植田氏族、神内、三谷、十河、三家、譜名、中絶而難分別、始闕之、俟後之智者、

綾公系圖（天武天皇十二年、賜綾朝臣、平城天皇又改而賜綾朝臣）日本武尊、武明王、(母吉備武彥之女、吉備穴戸武姬也、號讚留靈王)爾彌麻命、奈鬼爾麻命、篭王、多富利大別命、日向王、(始賜綾大領)多那君、依志君、(又曰意止之古君)奴乎古君大人、堅石大山麻呂、田麻呂、石床、菜長、職拾、季世、百行、能臣、(臣一作呂)是ヨリ後系譜ヲ不レ繼コト幾百年ナルベキ歟、予未之知、

藤家系圖

家成（中御門藤中納言、鳥羽院御宇為讚岐守、是讚州藤家之祖也）— 章隆（藤太夫、母綾大領貞宜之女）— 資高（羽床莊司）

資高ノ子
- 親高（周防守上京、新大夫大）
- 有高（野氏祖）
- 重高（藤大夫、羽床氏祖、庶府 豐田 柞田 柴野 平尾 有岡 平田 玉井 竹内 成宗 本庄）
- 資光（新居藤大夫、香西 福家 西隆寺等之祖、天曆年中、資光綾藤氏二千餘人ニ將トシテ平氏ヲ捨テ源氏ニ參リ、備中ノ國ヲ破テ、上京シ、院御所ヲ警衛ス、賴朝卿ノ下文アリ、）

資光ノ子
- 資幸（藤大夫、福家氏祖）
- 信資（次郎左衛門、西隆寺祖）
- 資村（香西左近將監）— 忠資（左衛門）— 資茂（藤左衛門、鎌倉將軍家御時備讚ノ間ニ海賊アリ資茂驍勇ニテ攻伏、搦本人擒捕テ六波羅ニ進達ス、北條氏ヨリ讚州諸島ノ警衛ヲ賜フ、）

- 資治（右衛門大夫）— 資宗（彥四郎）— 顯茂（新左衛門尉）— 新茂（左衛門、後醍醐帝御方人也、後亦細川定禪相和、而屬細川氏立武功）

- 資忠（太郎左衛門）— 資邦（又七郎）— 清資（又七郎、左近將監）— 元資（備後守、法名宗善、加賜攝州渡邊兩州所々采地）

元資ノ子
- 元直（備中守、號丹波守護代、幼名又六、細川政元……城、上京後曰上香西）
- 元綱（備中守、元遭害、而後輔佐養子澄元之、嵐山ニテ戰死ス、）
- 元顯（左近將監、在國故曰下香西、綾南北、香河東西、四郡旗頭）— 元清（豐前守、建宗玄寺）

元顯ノ子
- 元成（越後守法名宗香、從細川晴元、顯武功、其名高矣、舟師二千餘人ヲ率テ、到波津ニ入リ、榎並城ヲ陷レ、晴元ニ與ス、）
- 顯光（次郎）
- 顯親（三郎）
- 資茂（四郎、假植松氏、資茂能射、其飛矢八町、其名顯四方、公方義植公、召資茂而賞射術、公感歎之、賜桐紋、而資茂恐僭上、故除其花、以用北斗點、曰株桐之紋）

資茂ノ子
- 資方（新居權守）— 資教（香西大隅守、爲駿河守元敎伊賀守佳清二代之執事）
- 資正（植松備後守、初名帶刀）

- 元敎（駿河守初名元治、法名宗信、元龜年中爲毛利家之手合、香西宗信備州兒島ニ發向シ、加陽ノ城ヲ攻ル、于時勝保降テ東西ヲ不分、城兵其勢ヲ乘テ出、家宗信亡、）— 佳清（伊賀守法名宗可、此管領家之一字、元龜年中ニ父元敎兒島陣ニ討死、其後執事香西大隅守、輔佐幼主伊賀守、而出陣ス其比織田信長京師ニ横行ス、阿波讚岐之兵將攝州野田福島中之島ニ城ヲ築テ本願寺ニ力ヲ合セ信長ヲ防、信長先鋒ヲ以テ攻之江州ノ淺井朝倉ノ後ヲ襲フ、故信長ノ兵將退散ス、此時伊賀守八歲ニシテ攝州ニ出陣シ、二千餘人ヲ以テ、福島ノ城ヲ守ル、城中ニテ疱瘡ヲ病ヌ、男子バカリニテ、疱瘡ノ術ヲ不レ知、河將日ニ入テ盲目ス、是其撤ノ元基ナリ）

右南海通記ニ見エタル全文ヲ記セルナリ、尙三代物語、新選玉藻集等ニモ見エタレド、皆此書ニ據リタルナリ、サテ此編纂ニヨリ、彼是ノ家ニ傳ヘタル系圖ヲ集メ見ルニ、香川氏ヲ始メ、羽床平尾稻毛ナド云氏々ノ記、皆綾公ノ系圖ヲ本トシテ藤家ノ系圖ナド取交ヘテ書ルガ最多シ、中ニハ異同ナキニシモアラズ、今一々錄スニ遑アラズ、因テ其出ル處ヲ知ン爲ニ此ニ載ス、

宗像井上二社記　萩原村ノ祠官、眞鍋大隅ガ記セル宗像井上二社記ノ中ニ、栗作ル里ヲ栗井村ト云、麻作里ヲ麻村ト云、大麻村、大畠村、麻績村、麻野村、綿作里ヲ綿邑ト云、姬ノ郷邑ヲ、今木之郷村ト云、爰ニ社アリ、忌部ノ神、來從住所ヲ、竹田邑今ニ忌部ノ社アリ、笠縫居處ヲ笠岡村ト云、簑作里ヲ簑浦ト云、郡名豐田郡ト云ヲ、神田郡ト云、郷ヲ姬郷ト云、是姬神座ス所ナル故ナリ、諸ノ神資衣物上納ル國故ニソヌキノ國ト云、風土記ニ見エタリ、又井上尊神ノ御父母神ヲ、三野豐田兩郡ニ祭リ玉フ、父

神山ト申ス、今三野郡中村ナル都上山ナリ、粟井村ニ母神山アリ、爰ニ白山宮アリ、今ハ羽上山ト號ス、今ニ當所ニ白山宮ヲ祭ル、二社アリ、日神ノ御妹ヲ木之鄕ニ祭ル、稚日女尊ナリ、今紀伊國日前宮ニ祭ル、木之鄕ニテハ千色大明神ト申ス、御孫瓊々杵尊ヲ祭テ、高屋積宮ト號ク、后神木花開屋姫命是ハ室本村ニ祭ル、神代ノウツ室ヲ表シテ、村名トスルナリ、日御神ノ御神酒奉ルトノ謂ナリ、此所ノ民糀花ヲ拵ヘ、村々國中ヘ賣ル、是上代ノ法ナリ、花稍村ニ一放宮ト號社アリ、木花開屋命女ノ產ヲ祈ル處、靈妙アリ云々、

右明和丙戌年七十三歲ニテ記ストアリテ、此時ノ聞傳ヘヲ記セリト見エテ、中ニハ取ルベキコトドモアレバ、爰ニ載ス、サテ粟作里ヲ粟非ト云ハ、キトエト通フ故粟殖ノ轉リタルニヤ、又豐田ヲ神田ト云ルハ、既ニ論ヘルガ、尙又思フニ、倭名鈔ニ、安藝國高宮郡刈田ハ加無多トアリ、サレバ刈田ヲ神田トモカヽレシナルベシ、姫ノ鄕ヲ木之鄕ト云ハ、既ニ辨ヘ置レシ如ク、僻言ナリ、サテ風土記ト云書ハ、爰ニ引ルハメヅラシ、讚岐風土記ハ元明天皇ノ御世選ヒ玉フハ、サラニ總國風土記ノ中ニモ漏タリ、但南海通記ノ中ニ、香川ト云ハ上世諸國ノ風土記ヲ按定メラル、時、此川ヲ按ルニ、河水南山ニ源シテ、云々ノ文アリ、是モ風土記ヲ見テ書ルニハ非ズ、サル云傳ヘヲ聞タルト思シキナリ、此外ニ引用ヒタルモ、未見アタラズ、尙能尋ヌベキコトナリカシ、

數西物語　丸龜下南條町ニ數西ト云僧アリ、大坂陣ノコト粗覺シ由聞エシカバ、元祿六年正月十九日、召テ聞シメ玉フニ數西語リケルハ、大坂ノ軍ハ、慶長十九年九月二十二日、其沙汰アリ、其後數西二十二三ニテアリシガ、天王寺ニ居テ鐵砲ノ音、大筒石火矢ナドヨ々聞エ候、十一月四日藤堂公井伊公御先手ニテ戰ヒ始リ、十二月二十四日御和睦調ヒ御陣引セ玉フ、其節南條中將一家並ニ族類大坂ヘウラ返リシ罪ニヨリ、磔ニカヽリ候、サテ城ノ堀ハ埋メ候明年五月五日、又軍始リ、御城火起リ燒候、前將軍ニハ茶臼山新將軍ニハ若山ニ御陣トラセ玉フ、御館城ノ間、長曾我部落人トナリ、八幡ニテ捕ヘラレ、磔ニカヽリ候、此時米一石價十七匁ニテ候、秀頼公御鷹野ニ出玉フヲ拜ミシニ、大男ニテ馬ニ乘セ玉ヘバ、馬ノ背タワミ候、サテ大坂陣ノ時ハ、生駒一正公御城高松ニアリ、其後此丸龜ヘ移ラセ玉ヒ、又七年アリテ高松ヘ引セ玉フ、其時ハ觀音寺ニモ城アリテ、御家來上坂勘解由、一萬石ニテ御城預リシナリ、此城ハ坂本ト上市トノ間ニアリ、引田城御息生駒左近殿預リ候、數西父ハ商人ニテ、幼時父ニ從ヒ、大坂ニアリシ程ニ、父ハ流丸ニ中テ死リ候夫ヨリ家ニ歸リ候ハ若キ時ヨリ身健ニシテ瘖ヲ二度咳氣一度、病リシ、今年百歲アマリニナリ候ヘド、病ト云コトヲシラズトイヘリ、

氏太神、速岳神、梶洲神、國衆神、船山神、松井神、賀富良津神、

氏太、速岳、梶洲等何處ニヤ、今詳ナラズ、嘉元四年御領目錄ニ、梶元名ト云地アリ、是モ詳ナラズ、思フニ梶洲梶元イヅレゾ字ノ誤リタルニテ、同處ニヤアラン、試ニイハヾ、三木郡牟禮鄕ニ楫取ト云地アリ、取ノ字丸トカヽレシヲ、草ノ手ヨリ元ト誤リニモヤアラン、又取ヲ須ノ假字ニ用ヒタレバ、舊クハ加知須ナルヲ、後ニ加知登利ト唱ヘツルニテ、爰ノコトナドニヨタハナキヤ、此外ニ楫ノ字ノ附タル地名ハ、綾郡林田鄕ニ上楫下楫ト云アリ、尙能考ヘ定ムベシ、國衆ハ久佐加ト訓ナルベシ、今寒川郡田面村ニ日下ト云地アリ、是ナルベシ、全讚史ニ田面村ニ天皇社アリ、古大社ナリシガ、今ハ衰ヘタレド、其礎石尙存リト云リ、此神ニヤアラン、船山ハ或說ニ、香川郡淺野村ニ船岡山アリ、爰ニ小祠アリ、是ナラント云リ、松井ハ松井御前社ナラント既ニイヘリシガ、尙牟禮鄕ニモ松井ト云地アリ、賀富良津ハ、今白方村ナル海岸寺ノアタリヲシカヨベリ、此所ナルベシ、是ハ海岸寺ヲ伽毘羅衞院ト云ニヨリ、ソヲ訛レルナリト云人アレド、サニアラズ、賀富良津ト云ニヨリ、伽毘羅衞國ノコトニ思ヒ寄タル寺ノ名ナリ、爰ニモ小祠アレド、尙今ノ熊手八幡宮ナドニモヤアラン

長興寺　梅松論ニ、細川四郎入道義阿、湯治の爲にとて、相摸の川村山に有ける處、陸奥守顯氏の方より、居まで無異に御上洛の由、使節を遣しけるに、戒敵の中に有ながら、一功をなさゞらむも、無念なり、又存命せしめば、面々心元なく思ふべし、所詮

一命を棄り、思ふことなく、子孫に合戰の忠を致さすべしとて、使の前にて自害す、此事將軍聞召れ云々、天下をいひつの後、義阿の爲とて、子息奥州、洛中の安樂寺、讃州の長興寺を建立せられ命一臨よりもかろくして沒後に其威上られし有がたきことなりとぞ、

長興寺今アリヤナシヤ、高松ニ長興庵ト云ハ今アリ、

我拜師山　南海流浪記ニ九月廿一日、至ニ大師御行道所、世號ニ世坂一、參詣、其路險岨、老骨難レ攀、路只人ニタスケラレテ登至、此行道路于レ今草不レ生、清淨寂寞タリ、南北諸國皆見ヘテ、眺望選レ眼、此行道所、五岳中岳、我拜師山西之岫也、大師此所觀念經行之間、中岳青巖綠松、三尊釋迦如來乘レ雲來臨影現レ玉フ、大師拜レ之、故云ニ我拜師山一也、此行道所數刻、大佛頂寶篋印等陀羅尼、滿眼所レ及、海生山獻等益生ニアリ、如來影現之事、貴目出度覺テ

我拜師の山常にすむなる夜半の月來りて照す嶺にて有ける」今按ニ我拜師山ヲ空海ノ師ヲ拜セシ故名ケラレシトハ信ラレヌコトナリ、何ニト云ニハ我師ヲ拜スルトナラハ、拜我師山トコソアルベキヲ我拜師山トハイカニゾヤ、是ハ後人何心モナク付シ名ナランヲトモイフベケレド、サテハ我師トハ云マジキコトナリ、カニカクニ事辨ヘヌ輩ノ附會ナリ、山家集ニわかはいしさといふを、其邊の人はわかいしとぞ云トアルニ依テ思フニ、古若林トイヒシヲ、例ノ字ヲ作リ改メシナラン、倭名鈔ニ林郷ヲ皆拜師ト書ルニテシラレタリ、

樟の淸水　西讃名產出所鈔ニ、法然上人讃岐國に流罪の時、此處へ上り給ひ、水を乞給へとなし、依之樟を以て地を堀るに水涌出しとかや、于今樟の淸水とて、上人の歌に

南無は卅阿彌陀の樟て堀る淸水末の世迄もふつふつと涌」今按ニ此水樟以テ堀シナド云ハ、固ヨリ信ラレヌコトナガラ、此歌今古ニ膨リテ、世ノ人能シレバ、心ナキ人ハ、イカニシテ此編ニ載セザリシト思フメリ、何ナル好事者ノ爲業ナリヤ、聞モウルサキ詞ヅキナリ、

芋畑　芋畑記ト云書ニ、西行水莖岡ニ庵シメテ、五年バカリ居ケルニ、一年八月十五夜、月イトアカリケルニ、アクガレ出デ、アタリノ芋畑ニ立ルヲ、畑主芋盜人ナラント咎メケレバ、サモ思ヒ玉フラン、今宵ハ芋名月トサヘイヘレバ、是ヲナム得ムト思ヒテナリ、イカデ賜ハラシヤトイヘバ、歌一首物シ玉ヘ芋ハ得サスベシトアリケレバ、「月見よといもか子ゆゑもの寐いりしをおこしに來たかなにか苦しき」トヨミケレバ、畑主イト興シテ芋堀テアタヘシトナン、是ヨリ處ヲ芋畑トハヨベリ、

笠掛櫻　曼陀羅寺ニ笠掛櫻ト云アリ、西行笠ヲ、此木ニ掛テ、「笠はありその身はいかに成ぬらんあはれはかなきあめか下哉」以上里俗ノ傳フル處ニテ、山家集撰集鈔等ニ見エズ、是亦好事者ノ造リ事ニヤ、

七寶山　相傳フ、空海七寶ヲ以テ、琴彈山、稻積山、不動瀧、興隆寺、岩屋寺、船積寺、神正院等ノ七處ニ埋メテ、各石塔一基ヲ立、因テ是ヲ七寶山ト云、今按ニ此山志保山ト云ニ附テ、僧等ノ七寶ノ字ニ改メツルカ、即テカヽル附會ノ出來ルナリ、空海何ノ緣アリテ、カヽル寶ヲ地ニ埋メシニヤ、七種寶ト云中ニハ金銀モ入レリ、總テカヽル物ヲ地ニ埋ムハ、古キ世ヨリ堅キ制禁アルコトナルニ、何ヲサル事スベケンヤ、志保ト云ハ阿波國ニモ志保村ト云アリ、讃岐ニ近キ處ニテ、其村ニ入ル處ヲ塩入村トイヘリ、又甲斐國ニモ志保山ト云アリ、皆同ジ義ノ名ニテ、石秀ノ義ナルベシ、石ヲ志トノミ云例多シ、秀ハ物ノスグレテ多キヲ云、何レモ石ノスグレテ多カル故ノ地名ナリ、又此山ノ東ニ出タル端ヲ、塩木ト云モ志保崎ノ義ナルベシ、

香川彈正忠謝禮狀　森長見ガ國學忘貝ニ、予ガ家ニ永祿三庚申年、當國多度郡天霧山城主、香川彈正忠之族ヨリ、賴マレテ、加勢セシコトアリ、其謝禮狀、今ニ所持ス、其客文曰、今度從ニ阿州一、當國亂入之刻別而御入魂之儀候間、賞所知行之內、多度郡葛原莊、鴨請錢十三貫文、令ニ合力一候トアリ、

今按ニ請錢十三貫文トアルハ、鴨村ヨリ納ムル所ノ租稅カホドアルニ非ズ、香川氏ノ細川氏ヨリ請得タル所ノ租稅ニテ、イハヾ鴨村ヨリ出ス所ノ租稅何百石ノ中ニテ、細川氏ヘ十三貫文納テ、其餘リヲ德分トシテ自得ツルナリ、既ニモ論ル如ク、當時香川香西等ノ地ヲ領セシハ今世ノ田地持ノ如ク、官ノ田ヲ己ガ有トシテ、ソヲ下民ニ下シ分テ、

佃ラシメ、其出ス所ノ租税官ニ納メシ餘ハ己ガ德分トスルガ如シ、是ニ諸錢トアルニテ知レタリ、

香西小三郎宗久　家浦ノ事記セル書ノ内ニ、高松香西城主、香西伊賀守吉仲ノ次男、香西小三郎宗久、内室ハ香川民部大夫ノ女ナリ、岡田山ノ城主トナリ、知行一萬石持リ、天正十四年二月落城セリ、其時宗久ノ子長十郎ト云者、年三歳ナリシヲ、乳母妙岑抱キ、香川氏ノ城ニ入リケル、是モ落城ノヲリカラニテ、積浦船積寺ニ隱レシニ、此寺モ亦焼拂ハレ、家浦ニ落行、岡田長次郎ト名ヲ改メ、爰ニ住リ、長次郎子二人アリ、兄ヲ忠三郎、弟ヲ六郎左衛門ト云、六郎左衛門此浦ヲ開テ、始テ村ヲナセリ、此人今池神ト崇ヒ祭レリ、子孫今尚存リ、

今按ニ四國平均ハ、天正十三年ナルニ、十四年トアルハ疑ハシ、傳ヘノ誤リナルベシ、

頭名　此地大村ニ、祭祀ノ頭人ト云者十八戸アリ、頭名ト稱シテ、各其目アリ、毎歳番次ニ其祭リヲ執行ス、

一番公文、二番利貞、三番徳前、四番下司、五番光吉、六番包光、七番國安、八番正光、九番則貞、十番國包、十一番森國、十二番修理、十三番包光、十四番德成、十五番神主、十六番總官、十七番是松、十八番神官、

今按ニ下司、神主、總官、神官ナド云ハ、社ニ仕ル人ノ官名ト聞ユレド、其餘ハ何ナル由ノ名ニヤ、人ノ實名ガ、又氏カ、尚此外ノ村ニモ處々ヨリナ[illegible]デリ、今村々ノ小地名ニ人ノ實名ニ似タルガ多[illegible]者カヽル名ノ轉リタルニヤ、

表百姓　百四五十年前マデ、表百姓ト云ナリ、其カ下ニハ名子家來下人ナド云アリ、戸籍ナド記スニハ何某家内何人、居宅何間ニ何間、家來又ハ下人何人家來居宅何間ナドカヽレシナリ、

郷境松　木之郷村ナル、羽上山ノ峰ニ高飛ト云處アリ、其處ニ大ナル松樹アリ、是ト粟井村ナル菩提山ノ松、出作村ナル庵ノ松、觀音寺ナル獅子三昧ノ松トヲ合セテ郷境ノ松ト云傳ヘリ、高飛ヨリ彼處々ヲ見渡セバ、繩ハヘタランガ如ク、眞直ニ見ユト云ハ、

赤氣　僻見記ニ（是ハ高松ノ事記セル書ナリ）明和七年六月十五日、星月をつらぬく、九月廿三日夜北の方赤氣あらはる、赤きこと朝日の出るが如し、八ッ時より東西共に赤くなり、南計り少々殘り、曉に至り常の如く晴天に相成候、明卯年旱魃、當國百六十三日、雨なし、大不作に因て、貢物二萬石御減少、其上御庫をひらかせ、窮民を救せ玉ふ、

天學家曰、慶長年中ニ赤氣あらはれ、果して關ヶ原の一亂作り、其後慶安年中に亦あらはれ、九州島原の賊起りたり、今御治世なれば、さして兵亂のきざしにてもあるまじ何如あらむやと、申内中國四國寅卯干魃、これによりて見る時は、至極旱魃の相にてありけり、

御蔭參　同書に明和七寅年は伊勢拔參り流行、當國よりも十萬人餘り參りしよし、

今按ニ玉勝間ニ、寶永二年伊勢の大御神の宮におかげ參りとて、國々の人共おびたゝしくまうづることの有し、その數をつぎ〳〵記したるやう、四月上旬より云々、凡閏四月九日より廿九日まで、五十日の間すべて三百六十二萬人也云々、又享保三年正月元日より、四月十五日まで參宮の人凡て四十二萬七千五百人、是は世の常の年なりトアリ、去ル文政十三年庚寅ノ春當國ヨリ參リタルモ亦夥シ、凡村毎ニ多者三四十人ニ餘レリ、

翠實　嘉永三年三月ノ初ツ方ヨリ、何處トモナク小竹ニ花咲テ即テ實トナレリ、形小麥ノ如クテ少シ大ナリ、是ヲ取ルニ數トテ少キ笥ノ蓋ノ片ヘ除タル如キ者アリ、是ハ口ヲ手ノ指ヒロゲタルヤウニ刻ミヲ付、其刻ノ處ニテコギ取ニ便ヨシトテ、サル物作リテ、取者モアリ、又手ニテコギトル者アリ、能取者一日ニ四斗バカリモ取レリ、是ヲ乾テ臼ニテ舂ハタキテ粉トナスニ、一斗舂テ粉四升バカリ得ツ、サテ是ヲ團子饂飩ナドニ作テ食フニ、味小麥ト大ニ異ナラズ、是ヲ煮ルニ魚ヲ合スレバ、解テ形ヲ失フトナム、今年ハ年比打續キテ年得ヌニヨリ、貧者艱乏クシテ、飢ニ及ヒナント、衆テ歎キ居タリシニ是ニヨリテ飢ヲ免レタル者モ多カリ、中ニモ大麻山ニハ、殊ニ能實ノリテ、取人四月ノ初ツ方ヨリ、廿日バカリガ程ハ、一日ニ十石ニモアマリツラント聞エシ、此實イト散易キモノニテ、五月ニナリテハ皆チリタルガ、跡ヲ根下シテ、芽ハエタリ、牛馬鷄ナドモ好ミテ食ヘリト云、

細川土佐守賴弘　仁保浦ナル金光寺ニ細川土佐守賴

弘ノ墓アリ、此人イカナル人カ詳ナラズ、細川治部少輔滿益土佐守護タリ、其子持益持益ノ子勝益皆土佐守タリ、或ハ此族ノ人カハタ江南艸山ノ細川カ、武家評林ニ源頼義ノ一族ニ讃岐守頼弘ト云人見ユ、サレド永祿十年丁卯十月二日薨ズトアレバ此人ニハ非ズ、

松王小兒　福原ノ都營ントシ玉フ時、松王小兒ヲ人柱ト云モノニセシコト云傳ヘリ、三代物語ニ平相國賜二中村民部正食邑一、縣令中井左馬允、食二采於閒坐郷一、曰二中井坪一、松王小兒父也、郷正中井藤左衞門者其裔、而至レ今三十七世、綿々不レ絶小兒遺忌必往二兵庫經島山來迎寺一、損爲ストイヘリ、今按ニ小兒ハ健兒ヲ訛ルナリ、類聚國史伊勢勅使ノ條ニ、近江伊賀伊勢等國、每レ至二堺首一、目以上一人、率二郡司健兒等一相迎祇承、又延喜式諸國健兒ノ條ニ、讃岐國一百人ナドアル是ナリ、今ノ世ニ云フ驅出人ノ類ナリ、サテ兒ヲ傳伊トヨムハ、字書ニ研奚切音倪トアレバナリ、

弟橘姫　弟橘姫ハ當國ノ人ナルコト、或家ノ記ニ見エタリ、コハ古書ニ見エヌコト故、イカヾト思ヒタレド、穗積氏ノ此國ニ由アルコト今モ其子孫アリト聞ユレバ、聊其據アルヲ以テ載侍リヌ、

狹横　或說ニ、讃岐ハ狹横ノ義ナラントアルヲ、皆ヲ奴幾ト云ハ布帛ニコソイヘト既エイヘリシハ能思ヘバ誤ナリ、萬葉集ニ日之横ト詠レタレバ、此說モ尙スラカタクナム、

稗田阿禮安麻呂　笠岡村ニ稗田ト云處ト阿禮ト云處トアリ、又隣リナル下勝間村ニ安麻呂ト云處アリ、イヅレモ聊ヘダヽリタリ、由アリゲナル名ナリ、

紀事　此地中村祠官齋藤甲斐ノ子千元ト云者アリ、天保十二年閏正月朔日、高瀨村ニ往テタツカタ歸リケルニ、其家近キアタリヨリ、心地ソコナヘルヤウナリシガ、即テ肌サムク、俄ニヒエ入リ、物モ發エズ歸リ來ツルニ、父甲斐其常ナラヌ狀ヲ見テ、醉擬タラント思ヒ、速フセナドイヒツルニ、ツト蹐リ居テ物モイハズ、シバラクシテ引離リ文机ニヨリテ、何カ書居タリシガ俄ニ刀持テ走リ出、其妻ヲ呼テ、彼書タルヲアタヘ、イヅコトモナク出シカバ、其妻後モ得オハズ、タヾ泣テ、父從テ追尋チシニ、フト叫ブ聲アリ、爰ニヤ行キシカバ、御社ノカタヘニ立留レリ、サテ連歸リシガ、人心地モアラヌサマナレバ、

尙醉擬タラント思ヒ、アタリノ人一人二人、ヨリキテ、醉タランニハ砥ヲ枕ニコソセメトテ、サル物モテ來テ、强テカツギフセタリシガ、俄ニ起立テ相馬トイフ箸ノアリシヲ取出シ、汝甲斐今イフ事アリ、ヨクキケト彼箸ヲ投アタヘシカバ、父何コトカイフラン、是ハ相馬箸ナルゾト怒リ罵ルニ、イヤトヨ音田ナル相馬ノ事ヲコソ賴ミ申スナレ、其事シリ侍ルヤトイフニ、父モ物ノ怪ナルコトヲ始テ悟リ、ゲニサルコトノ侍ルナリ、能承リヌ、サアラバトク歸ヲセ玉ヘ、トイヘバ頭打フリツヽ、今カクイフモ、是度地志選玉フト承リヌ、故若事ヲモ書載スベク、彼ノ選述ノ主ニ傳ヘテヨト云ニ、承リヌ、トク歸ラセ玉ヘ、今歸ラセ玉ヘト、頻ニコヒケレバ、此後ハ物モイハズ、ヒエ入ヤウナリトテ、引カヅキ此夜ノアカツキ方ヨリ、ヤヽ人心イデキテ、三日バカリノ程ハ、骨ナド碎クルヤウニテ、ワヅラヒシガ、其後ハ舊ノ如クナリケリ、サテ彼父翌日音田村ニ往テ、相馬氏ノ由緒ノ者求メテ尋子シカバ、今ハサシタル系圖モナク、聊書傳ヘタルモノアリシガ、其モ高瀨村ナル何某ガ家ニアリト云ニ、何某ガリ往テ、其書傳ヘタル物求メ出シ、ソヲ持來リ云々ノコト語リテ、地志ニ書載セ玉ヒテカシト云ニ、其物ノ怪カヽリシ時、其由詳ニ問フベキニ、惜キコトカナト云ヘバ、今ハサモ思ヒ侍レド、其時ハ物怖ク、且我子イカヾナランナド思ヒテ、其處ニ心モヨラズ物ノ怪ナラント思知リヌルモ、去シ比、我仕ル春日ノ社造リ修メシ時、アタリナル童子ニ神ヨリ玉ヒ、穢キ木ヲ用ヒダリ、今取除ヨト、彼童子叫ビ罵リシニ、其時モトク歸ラセ給ヘトイヒシカバ、彼童子即テ寐臥セリ、サテ彼木ヲ改メシニ、中ニ塚ノ木一本交レリ、故此事ヲ思ヒ出シテ、カクセシナリトイヘリキ、先ニ流寓ノ條ニ、將軍太郎良門ノコトヲ載セツルハ、此事ニヨリテシレ侍リシナリ、カヽル怪異コトモ、此外ニ尙ナキニアラネド、是ハ此編選ブニヨリテノ一ナリ、且ハ猶ク世ニ埋レシコトヲ尋子搜リテ編緝スルモ、一ニハ幽冥處ニ欣フ者アランカシト、此物語ハ記シ留ヌ、

○巡封陽秋

巡封陽秋序　詩賦文辭、所以敍游豫也、省耕省斂、所

以饗人民也、二者若不相關者、而夏諺曰、吾王不遊、吾何以休、吾王不豫、吾何以助、由是觀之、游豫奚害於事、我　公就封之歲十月、大巡封內、藤士毅嶽往以從、其道途所由、可以供詩我者、必識記之、命曰巡封陽秋、抑亦勸矣、意我　君爲政之暇按卷而作詩、因其湖山高下之勢、而論田野開墾之略、觀都邑相承之密、而稽撫字敎誨之方、因館傳供給之費、而憫人民奔走之勞、品水評山之中、必寓廢貪立儒之政、慈老惠幼之念、不出看花聽鳥之外、文瀾與恩波齊流、麗章與仁聞並傳、吾知深山窮谷之中、其必有皤然黃髮、擊壤鼓腹、相率謳歌、而賡德音於無窮者、夫然後游豫之果、有補于治、而斯編之作不爲徒矣、是爲序、

敎官　岩村秩識錄

巡封陽秋

伴讀　加藤毅識撰

文化十一年、甲戌夏五月、　公春秋十七、始就國、冬十月巡行封內、以視封界之廣袤、察土壤之肥磽、督風俗之淳澆、閱農夫之勤惰、省租徵、而周窮乏、申戒令、而警游惰、　五馬所過、里民扶老攜幼、簇集路側、欣々額手、咸懷望霓之情、陪　輿官員、藩相以下、至胥徒吏卒、凡若干人、省除冗濫、務從節約、扈從御乘、則供給多、而民苦、故兩備用東觀之半、臣毅以伴讀、特命從行、日侍左右、以助吟詠之餘興、既歸識記　五馬往還朝夕應酬之事、名曰巡封陽秋、以獻、若夫旌善劇惡之典、恤民勸農恤事、則職掌有其人、毅不敢越樽俎而錄之、

冬十月二十八日辰牌　輿發治城、　輿出北郭、沿外堀道中府、凡　輿馬所至、近邑大小保正、迎拜路傍、謁者在　輿側、唱名、

巳牌憩金倉別館　引流水、繞階除、松篁鬱茂、苔蘚滿地、瀟洒之景、最宜夏日、至永楓、五里而近、路經葛原邑、屬我支封　多度津侯、侯命先期指廠、以備　輿夫憩歇、而路程接近、故不休而過、

憩永楓亭舍　亭傍數楹、以備歇次、檻前湧泉、曲流繞欄而流、水性甘冽、殊宜瀹茶、抵善通寺七里許、

午牌館中邑山下氏　山下氏、多度郡大保正、宅隣善通寺、善通空海父、佐伯公名、因以名寺、海誕此地、故又號誕生院、昔時爲南海最大伽藍、天文中三好與香川搆兵、據寺爲陣、兵士失火、佛寺僧院、舉委灰燼、寶器珍藏多付烏有、斯後再造、總存十一、近代建二階堂及五層浮圖、結構偉峻、金碧煥赫、頗復舊觀、寺藏前世帝王告勅二十餘通、寺主世位權僧正、

申牌憩鳥坂亭舍　自善通寺、至此十里而遙、路經弘田碑殿諸村、鳥坂亦屬支封、坂上置小亭、以爲憩歇之次、抵上高瀨村六里、

晡次上高瀨邑三好氏　三好氏、三野郡大保正、凡輿馬所次、儀從衆多、館廨不能容、故除近習官僚外、藩相以下命近隣民家如寺家、爲宿次、入夜　公賦詩、召毅與評、盡日所歷、勝概盡　公在轎中、則默誦詩本、抵館舍、則吟咏推敲、以爲娛樂、溫恭簡默、不悅凡百雜枝、特好詩賦、出於天性、是以左右近臣、靡然嚮風、坐起必行硯韻本、從侍醫三田耕、最敏速、觸目風景、衝口而就、近侍長土岐頼昌、常在左右、研贊、是以　公益進於詩、

二十九日辰牌　輿發三好氏　夜來寒威殊甚、霜掩田疇、皚々如雪、霞彩映山、暾光射林、朝景稍澄、半晴可卜、今年夏大旱、三野郡最甚、沿途稻田、往々未穫、蓋旱澇不登、則衆田受稅官之點視、稅官檢之等差其租、故乃收穫、而有司不省、稽延至歲抄、是以民亦不甚欲檢田、蓋讃多陸田、收稻後、更犁其田、而播麥、今既秋稻不熟、又失播麥之候、則其窮益甚、憫檢田之法、名爲恤民、而實則病民、有司其可不留心乎、

巳牌憩仁保嶺麓次　自上高瀨、至此可十里、路歷大見竹田吉津諸邑、渡新名川凡地無亭館、則張帷幕、以爲歇次、

謁脫履八幡廟　在下櫃八里、吉祥院管祀事、

遂詣吉祥院　在八幡廟、西一里、凡　輿馬所至詣、寺主迎拜門前、謁者唱名、

覺城寺　在吉祥院北二百步、寺據隴上、眺望曠豁、

常德寺　在覺城寺北二百步、以上三寺皆在仁保街中、本寺故住持鳩峰和尚、以高德碩學、聞於當時、四方禪衲來學者、常數十人、及沒徒弟茶毘、分骨去、邑民爭收遺灰云、

停午館仁保邑塩田氏　宅在街中、其地市廓櫛比、衢衢北市、北瀕于海、南東帶山、戶數千餘、殷賈富人多處、

未牌舟遊中石　石在海中五里、分爲大小二嶼、其大者高三丈、徑六七丈、頂上平坦可布七十席、其小者崛嵌磊砢、不可穩坐、蝌步蛇行、纔抵其巔、其西爲

蔦嶋、有大小二島、大島東隅有獅子石、以形似名、
正與平石相對、其間僅容刀、此日監船官、戸祭櫟樓
船、相迎膠淺不檥于岸、　公與近臣七八艘、駕輕舸、
就樓船、藩相以下皆乘別船、　輿馬僕隸不從、石上
張幔置酒、命漁人、引網、大盤盛潮水、放小鮮、鰛
魚最多、海鯽烏鯽河豚比目、雜糅其中、潑剌喚喁、
乃命廚宰、烹飪以薦、
下中遊大神島　在平石東南三里、周廻二里、上有嘗
廟、因名、距陸三百步許、潮滿可舟、潮退則步、時潮
已退　公與而去、
謁加茂明神祠　在仁保街東　落次撫田氏
晦辰牌　輿發撫田氏、詣金光寺、　在街中、堂前
一井、大旱不涸、水宜釀凡榜印金字者皆用此水製云、
憩父母嶺嶽次　自金光寺至此五里而遙、路沿海塘登
嶺回顧後隊儀衛聯綿平平沙、宛如蟻陣、　公立嶺頭
指點波上白鷗示般曰、吾詩思方屬渠、般乃拜唱絶句
曰、萬頃晴波浸碧空、嶺頭振袂對長風、白鷗囑汝無
飛去、方入吾　君詩句中、
下嶺又沿海塘、軟沙渺々、沒踝、至室本七里、
巳牌憩室本幕次　矮松夾道、風景瀟洒、全似播之舞

子濱、
詣興昌寺　寺傍丘壟、上有一夜庵、昔山崎宗鑑、寄
年來住此地、鑑善書、好俳歌留客不過一夜、嘗自作
歌、題壁曰、若外分猺注外許古郎失傑外欲嚇鈌異地
發禿馬立外傑々奶傑仍却古、其意謂、客來直去者上
也、盡日而去者次也、夜去者又其次也、一宿而去、
斯爲最下、因自名庵、其高致可想、淵明嘗曰吾醉欲
眠君且可去、正同此意、
停午館神惠院　又號觀音寺、眞言宗道場、八十八寺
之一伽藍安觀音大士像、空海所作云、又有藥師愛染
彌勒等堂、從室本至此凡十里、此寺昔時爲讃之巨刹、
故以名邑、々在寺南、東北帶川、西瀕于海、買臨三
千餘、市廛比甍、闤闠迤行、富庶亞于城治文化丁卯
街中失火、延燒二千餘戶、己巳又燒五百餘戶、自此
戶口凋耗里閈蕭索、幾時繁華掃地、至今猶未能復、
謁彈琴八幡廟　記曰、大寶三年八月、西海震鳴、雲
翳日光、一道白虹、繞于山腰、有舟至海岸、中載一
翁、彈琴其韻流楚紛絃瓔徹溪谷、僧日證、嘗住此山、
怪就翁敲之、翁答曰、朕爲膳神天皇、久居豐之宇佐、
今將近帝都、偶過此愛山水秀麗聊消遙耳、證曰、凡

民多疑、無徵不信、願翁示一大異事、以厭衆心、此
夜海中數十頃、叢生松篁、衆愕然始欽厥靈、證乃募貲
男百餘人、引舟上山巔、造廟奉琴、因號彈琴八幡云、
邪誕詭譎不足信、蓋因彈琴之名、傅會耳、姑錄以貽
後史、
遊象鼻岡　在廟北百步、以形似得名、土地磽确不毛、
唯松生之、北望則蠡偏諸山、施藍潑翠、盡攢于目睫、
烟波淼漫、布帆往還、宛如瑠璃盤中散化、西讃勝景、
是爲第一、此日微雨、陰雲四亞、不能極望、而海色
空濛島嶼隱見、近者如遠、有者乍無、變態百般、更奇、
坡老咏西湖、詩有晴好雨奇之句、吾將移贊此景、
抵有明濱幕次　自象鼻岡、右轉下山一里許、乃抵幕
次、白沙皚々、彌望曠廓、宛如曉月照地、邦人謂曉
月、爲有明、因有此名、近時有四人建議開墾斥地、
曰沙上播草實、積年久、則草根朽腐、沙化爲土、因
施墾畬之功、可得沃田數千頃、於是課里民、播草實、
數月間莽草穢蕪、所謂曉月照地之景、大減昔時、而
開墾之議亦廢焉、其人後以黷貨、見逐斥、嗟若人、
眼孔如豆、徒見錐頭之利、而妄議開墾之事、翅上勞
民、而功不能終、可謂騃混沌而亡徃命矣、今日之景

宛如西施面上生疥癬、終使後人歎惜不能巳、後來識
逐、安知非造物之報、
未牌憩十三塚幕次　在大野原、自有明濱、至此六里、
塚散在田中、一壟壘々、不特十三、就視之皆聚小石
爲之、蓋大野原僞爲草莽磽确之地、寬永中、平田氏
從江之大津、搬家于此、率土人闢草萊、因掘死礫聚
之田塍、後人傳會帳曰、是令我鄉氏十三士戰死瘞之埋
其尸之所、如然則覆土封之可也、何必聚磊塊小石、費
多少閒工夫哉、世間稱古墓墳者、大都類此、
次平田正宥宅　在塚南一里、平田氏先世開墾此邑、
躬食邑人、其中萬石、子孫相繼、世稱素封、世數出
金助工役、是以官列之士籍、近世家道殷衰、而庭園
之美、家宅之大、館獻供張之豐、比他爲最優、其使道
名春秋館、階前有椎樹、其大蔽牛、老枝槎牙樹身半
死、蓋爲五六百年物、分派堰溜池水、引之庭中堦下、
紆闢平日水繞堦外、客至則上閘、流泉迸階除、樹蔭
掩蔽、苔蘚滿地、風景幽邃、對之半日、使人滌盪塵
煩、庭有小亭、可坐五六人、　先公其親書洗杯二字
顏之、　先公愛此園歲中一次、必來遊、
正宥獻馬　與之三歲所產、毛色騂赤、命調馬官山脇

有貞取之、眞性駿逸馳如掣電、尋常溝瀆、一躍超過、昔宇治之役、四郎公騎駿生食渡河先登、其名赫于千古、　公因賜名大渡、

十一月朔、巳牌觀借椀穴、　在邑中八幡廟後、穴口大窄、匍匐入之、其中黝暗燒炬照之、廣可坐六七十人、四圍甃石築之、上覆三十石、是蓋上古富室藏財土窖也、或恐公侯墳塋、經年久遠、封土頽崩而露出也、口碑相傳、邑中人家將享客、則宿至穴前、拜祈餜具、詰朝再至、則出椀楪與之、如所乞之數、享終則滌濯反之、嘗有人誤毀一椀、於是穴不復借椀、

午牌館庄司氏觀水車、　亦邑中富家、以搾油爲業、其油以棠子棉花子爲之、水車之製空中架大筧、遠引流水、々從屋上直注車頭、車徑可三丈、車軸兩畔陣碓舂、磨篩等器、車軸一轉四功並擧、其功可敵百夫水聲澎湃、響如奔雷、近製逆施之法、獲利最多、蓋順施則車右旋、而轉緩、逆施則左施而轉疾、因水力之强弱也、

未牌觀堰閼池　近山諸澗集爲巨浸、周回三里許、西面築大防、長二百步、以蓄水、々滿八分、則溢爲瀑布、直下七八丈、亦壯觀也、

祈地藏院　在萩原邑、眞言道場亦八十八寺之一、寺藏空海所書急就章、其帖以五采色絹爲之、帖尾大同年空海書、七字隱々可辨、蓋旣書、又勾消之、不知何故也、或疑是隋唐名家之筆、海自唐齎歸、欲衒書名於當時、竊署己名、而覺不能擬、似故勾消之、使字体不可辨識也、蓋筆力勁健、草体俊逸、與今時坊間所存、海書、自然不同、此眞則坊間之書、皆僞也、彼眞則此恐非海之親墨焉、眞贋之論姑舍、苟一使其非海書、亦出隋唐名公之手、則不失爲希世之珍帖、末有僧隆光跋、按隆光護持院住持、元祿中行巫蠱于峽邸者、使若與跋古帖所謂佛脚塗糞也、又以草体難讀、使東寺僧南谷朱書小楷其傍、南谷何爲者、妄涴寶帖、是佛而割脊也、脚下之糞、滌之猶可除、而上之脊將如之何哉、吁希世之珍、爲一二俗僧所汙、其罪投之阿鼻可也、

申牌復次正宥宅、　夜召正宥父子賜酒、

二日巳牌　與發平田氏、觀波門、　在和田村、自平田氏至此七里、港口築隄、拒通潮衙、以便泊船者、邦人稱之波門、近世藤村氏築之、自摧船稅、蓋官許之也、

午牌館和田邑藤村甚氏、

邑濱于海、人家五六百、農商雜處、藤村氏邑中豪族、支屬蕃庶分爲七家、藤村源氏爲其本宗、家最饒富、積貨巨万、近時獻金、列士籍、甚助源子近分烟者、

憩閼屋林幕次　在甃浦、距和田邑七里、海擺小石、爲楕形、呼小判石、布之階除甚佳、

未牌到鳥越幕次、　左閼屋林西八里、此爲豫讚分界之地、　與到界牌所而反、自和田邑抵此、道沿海灣、回顧則御崎之山、兀立艮隅、蓋入海五十里、地勢環抱、隔海相對、來時所經仁保室本姬濱有明花稻和田諸邑、歷々列於海濱、海中諸嶋、曰伊吹、曰股、曰丸神、皆隸吾西讚、從治城至此、直徑九十里、

復憩閼屋林幕次、　途由來路、

申牌次藤村源氏、　源次治産儉嗇、而性嗜書畫、苟遇適意者、不吝百金買之、便堂書上架、揷古帖、蓋集本邦古昔名人之書者、若定家實朝空海能因凡數十家、皆見不能盡記、世稱定家所書小倉山莊百首國歌、一葉直千金、此帖所收諸名家、皆不出其下、語曰長袖善舞、多錢善買、如源可謂善買者矣、雖然價愈貴贋愈多、自非慧眼如炬者、未易辨也、源之所藏、豈得無玉石並收之弊哉、

三日辰牌　與發藤村氏　此日天陰、北風砭肌、

巳牌憩十三冢幕次　來時所憩、

午牌館持寶院　在本山邑、亦八十八寺之一、自十三冢至此、十里餘、寺前之河北流十里、繞彌琴山、入于海、

觀松　在植田村神照寺庭中、其大四人連抱、有餘廣袤蔭數十頃老枝屈盤、如渴蛟之赴水假蓋拂地、擧手可摩其頭奇觀實不讓曾根唐崎之松、惜乎樹在僻邑不過詞人墨客之賞、唯四國巡拜香客時々來見而已、嗚呼一樹隱顯、亦係于地況人哉、

憩上寺幕次、　在持寶院東三里、

未牌憩六松幕次、　有古松六株、因名、在上寺東七里、

下申復次三好氏、　自六松至此八里、夜微雨、

四日辰牌　與發三好氏、　朝晴暖氣如烘、

憩鳥坂亭舍、　遂詣寒氣祠、　讚國神祠列于祀典者二十四此其一也、堂僅數楹、官僅散卒一名、以供洒掃、中古以降、四國騷亂、舊祠多罹兵燹、於是正祠廢而淫祠盛、所謂二十四祠、今僅存五六、而草鞋樹錢之類在々尸而祝之、衆所煽揚、神亦隨降禍福、是亦可

以觀世風之衰矣、
午牌甜水榎亭舍
未牌宴金倉別莊、　賜酒群僚　公與近臣、逍遙水邊、
土岐賴昌在上流、泛觴流之日、必先賦詩、而後接取、
以飲、穀立石磯、口占絕句曰、何處寒泉沸、竹間分
派來、觴波不須起、泛得萬年杯　遂取觴而飲拜跪獻
壽　公悅、
申牌　輿入治城、　群臣謁稱相、稱賀而退、

巡封陽秋跋　右巡封陽秋一編棋崖先生陪輿之紀行而
序則尙里先生之所撰也、有此府志之選也、二先生所
創業而不卒其功皆相次而下泉矣大塚加藤尾崎等諸博
士繼其遺緖纂輯考訂蓋亦有年焉編既成而二先生之言
無係之首尾者是爲遺憾耳幸有此遺稿而所記亦係　封
內之事也且夫巡封之一事亦典故所存而於其府志亦似
不可闕也因而附之卷末以代其題辭云、
嘉永六年癸丑二月　　補助秋山伊豆源惟恭謹識

〇補遺

此編功畢リテ後見聞セシコト又能問正シテ記サバヤ
ト書綴セシコトドモアリシヲ、補遺ト名テ又コヽニ
書ソフ、
橫尾時陰　後醍醐天皇隱岐國ヨリ遷幸アラセ玉ヒ、
天下ノ政皆アラタマリシ時、伊豫國河野備後守通治
ガ、內奏ノコト叡慮ニ叶ヒ玉ヒ、豐原太夫將監兼秋
ヲ勅使トシテ彼國ニ遣シケリ、通治カシコクモテ
ナシ、送リノ船ナドイカメクシツラヒテ送リ侍ル、
八月十五日、讃岐國多度郡屛風浦ニ船ツヨセケルニ
ヲリシモ時雨フリキテ、程ナク晴タルニ、月サシ出
テ影イト清ラナリ、兼秋夜ノサマオモシロキマヽニ、
琴ヲ取出シ彈タルガ、暫アリテ琴ノ音カハリ、緖一
絃絕タリ、是ハアヤシキコトカナ、凡琴ノ秘曲彈時、
竊ミ聞者アラバ、緖絕ルト聞ケリ、サレド都アタリ
ニコソ、サル者モアレ、カヽル邊鄙ニイカニシテ、
サル者ヤアル、是ハ海賊ナド伺フナラン、アタリヲ
探見ルベシト、從者ヲシテ見セツルニ、向ノ岸ニ人
音アリ、ヨリテトガムレバ、我此山ニテ柴ヲトリテ歸
リケルニ、雨ニアヒ、是ナル木陰ニ避居タル處、ハ
カラズ珍キ琴ノ音ヲ聞テ歸ルサモ忘レ侍ルト云ニ、
人々倚咎メテ汝琴ナド聞ベキ者ノサマナラズ、若果

シテ然ラバ、今彈玉フヲイカニ聞ツルヤ、サレバト
ヨオノレ此道ニ心ヲヨセツルコト年久シ、今彈玉ン
ハ世ニ傳ル隋唐ノ音ニ非ス、東漢以上ノ音ニテ、南
宮讃ノ秘訣轉、四帖ノ曲ナリ、是ヲ調ニナス時ハ秋
月芦紅白、初無冷露時、寒衣尙未了、此句ニ至リ
緖絕タリ、其次ハ郞喚儂底爲、ト云句ナリト云ニ
兼秋聞玉フテ此曲ハ我家ヨリ外ニ傳ル者ナキヲ、彼
樵夫イカニシテ知リツルヤト、驚キ船ト岸トニテ論
フハイト便ナシ、コヽニ召ズベシトテ、即ヲヨビト
リテ、何クレノ物語シツヽ、サテ云ケルハ我今琴ヲ
彈ベシ、故其思フ處、音ニアラハレナバ、聞取玉ヘ
トテ、絕タル緖ヲ改メ、彈ケルニ、心高山ニアレバ、
美哉洋々タリ、心海水ニアレバ美哉湯々タリト答ケ
ルニ、兼秋大ニ感シ、其姓名ヲ問ヘバ、姓ハ橫尾名ハ
時陰ト申ス、父ハ大和介トテ世々天王寺ニ住テ、八幡
太郞殿ヨリ琵琶ノ傳ヲ授カリシ家ニテ、時陰ハ家ノ
通名ナリ、世ノ中騷々シキニヨリ、三十年前ツカタ、
ユカリヲ求メテ、此國ニ下リ、アサマシキ活業シテ
侍レト、音樂ノ道ハ、尙ステズアリケリトテ、又音
樂ノコト何クレト語リケレバ、誠ニ世ニ音ヲ知ルヲ
知音トイフガ、汝コソ知音ナレ、今ヨリ兄弟ノ約ヲ
結バント杯ナドトラセ、時陰二十六歲ニテ、兼秋一
年兄ナレバトテ、時陰弟タルベシト契リケルニ、時
陰云ルハ、我住所ハ鵜足郡山中村トイヒテ、コヽヲ
去ルコト一里バカリ、願ハ訪セ玉ヒテ、我父ニモ逢
給ヒテカシトイフニヤスキコトニ侍レド、此度ハ勅
使ノコトナレバ、私ニ足ヲ留ムベキニ非ズ、又來ム
秋ノ今宵ヲ契リ置ベシ、汝モ其時コヽニ來リ待ベシ
ト固ク契リテ、金子一包サシ出シテ、今ヨリ汝ト兄
弟タランニハ、汝ガ父ハ即我父ナリ、是ヲ以テ孝養ノ
資ニセヨト贈リケレバ、時陰イタヾキ受テ、別レケ
リ、兼秋歸京シテ又ノ年ノ秋ヲ待テ、難波津ヨリ舟
ヲ出シ、兼テ契リシ如ク、八月十五日、去年舟泊リ
セシ處トオボシキアタリニ舟ヲヨセ、サテ待ホドニ
人音モセザリケレバ、例ノ琴トリ出シ、搔ナラシ、
シラベツルニ、商ノ絃哀怨ノ聲アリ、彈ヤメテ、ア
ヤシキコト哉、商絃哀怨ノ聲アル時ハ、憂ニ沈ム人
アリト聞ケリ、サテハ時陰老タル親アリト、去年カ
タリシカ、是ガ喪ニアフヲ、今宵ノ約ヲ違ヘルニヤ
ト、其夜ハコヽニテアカシ、日ノ出ルヲ待テ、岸ニ

上リ從者五六騎ト、彼家ヲ尋子テ往程ニ、一里バカリ往テ、大道アリ、カタヘノ石ニ腰ヲ掛、休ミ居タルニ、翁一人藤ノ杖ツキテ來ルアリ、衆秋近クヨリテ、山中村ト云ハ、イヅコニヤトイヘバ、此處則山中村ナリ、旅人ノ問セ給フハ、上山中カ下山中カト云フニ、上カ下カソハ定カニ問サリシ、コヽニ時陰ト云人ハナキヤトイヘバ、彼翁涙ハラ〳〵ト打ソヽギ、ソレナレバ、問給フコトナカレ、ソレハ我子ナリ、サイツ比身マカリシナリ、衆秋驚キテタヘ入リケルヲ、從者呼サマシテ、助ケオコシケレバ、サテカヒナキコト哉、去年我ト兄弟ノ約ヲ結ビ、此秋必アハント契リシ故、昨夜彼處ニ待居タルニ來ラザルヲ怪ミ、今尋子來ツルナリトイヘバ、サレバ旅人ハ衆秋ヌシニシテ社オハセメ、去年ノ秋我子シカ〳〵ノコトカタリシコトアリ、其時オクリ玉ヒシ金子モテ衣ナド作リアタヘシコトアリ、サテ君ニ過マツリシ後ハ、暇ダニアレバ、ヒタスラ音樂ニノミ、心ヲ盡シ肝膽ヲ碎キシガ、其疲レニヤ、重キ病ニカヽリ、遂ニハカナクナリ侍リヌ、彼ガヤメル時モ、其事カタリテ、我死バ君ニ逢マツリシ處ニ葬レトイヒ置シマヽ、彼處ニ葬リヌ、今日ハ百日ノ忌ニ當リヌレバ、彼墓ニ詣ヅルナリ、サアラバ我モ共ニ參ラント、衆秋モ共ニ彼墓ニマウデ、サテ從者ニモタセシ衣冠ナドトリヨソヒ、琴一曲彈ヲ手向ツヽ翁ニ語リケラク、此歌ヨク聞玉ヘ、「此秋を昔になして人もかなはりしれぬ雲かくれ新しつかのかけ音もなし」「たよりもしらぬ此山中に我ふりすてゝ一聲はかりそれかとぞきく呼子鳥」是時陰ヲ吊フ詞ナリトテ、彈終リテ劍ヲ拔琴ヲ二ツニ打ワリケリ、翁イカニシ玉フト驚ケバ、今ハ聞知ル人モナシ、琴アリトモイカニセン、是此道ノ廢レヌル時至リタルナリト云ニ、翁イト感ジ、我里ハ上山中村ナリ、イザ玉ヘ導キマツラントイヘバ、今少シ思フコトアリ、一度都ニ還リ程ナク來リテ此ニ留リ、我時陰ニ代リテ翁ヲ養ヒマツラン、今既ニ天下一統シタレトモ、尙一變遠カラズ、速ニ仕ヲ辭メテ、共ニ隱レテ世ヲ遁レント、其處ヨリ別レテ歸リシガ、後イヒシ如ク、程ナク下リ來リテ彼翁ヲ親トシ、仕ヘテ身ヲ終ヘシトナム、

○右屛風浦記ト云書ニ見エタリ、是ハ花房物語ニ載セラレシヲ、書拔テ一卷トナセルナリ、サテ鵜足郡山中村ナド云コト、此アタリニ由ナク、又彼郡ニモナキ名ナリ、或說ニコハ山階村ナルヲ階ヲ品ト書タルヲ中ノ字ニ誤リタルナリトモイヘリ、サレド此記シザマ實シキコトトモオモヘラス、聊カヽルコトノ有シテ、聞傳フル人ノ伯牙鐘子期ノ故事ナド取交ヘテ如此ヲカシク作リナセルカ、ハタ形モナキコト僞リ作レルカ、事長ケレバ、其大要ヲ摘テコヽニ擧ルナリ、今西白方村ニ時公塚トテアルハ時陰ノ塚ナリト云人モアリ、是モ此物語ヨリ思ヒ附タルニヤアラン、

源平願狀　大水上神社ニ源平兩氏ヨリ納メシ祈願狀

源氏願書附上矢御神納之事　爰有惡臣、惱日本六十餘州、奪取數國、恣逞行跡、誠以前代未聞之惡逆也、上蔑天子、中奪公卿大臣之位官、下苦諸民、誰不惡哉、非其而已、保元亡爲朝源氏之一族、平治誅伐義朝一家、剩奪其領、寄已一門、大極榮華、實暴惡之至也、然有靈驗著明之尊神、奉號八幡大神、以直祈之、則感應不虛、今所祈者、下冥罪於平氏、惡勝利於源氏、俟雪會稽之耻辱永揭蘋蘩之敬禮者仍願文敬白

奉獻上　上折之矢

蒲生御曹司	源範賴	九郎太夫判官源義經	
畠山莊司次郎	重忠	和田小太郎	義盛
梶原平三	景時	同源太	景季
佐々木三郎	盛綱	同四郎	高綱
那須十郎	兆宗	同與市	宗高
平山武者所	季重	田代冠者	信綱
猪股金平六	則章	佐藤三郎兵衛尉繼信	
同四郎兵衛尉	忠信	鈴木三郎	重家
龜井六郎	重淸	西塔武藏坊	辨慶
駿河次郎	淸重	伊勢三郎	吉盛
片岡八郎	常春		

八幡大神
大水上天神
三島龍神　矢一筋宛

元曆元年二月廿五日

平氏願狀　敬白御立願狀　抑此度我若開利運者、遷當社於平谷都、可奉崇氏神若又無神力之功者、悟國家成四海魔王、報怨、仍願文如件

時元曆元年二月十五日

平中納言　　敎盛　　太夫　　經盛
三位中將　　資盛　　少輔　　有盛
祈願者　神田治部少輔貞家

右彼村ヨリ注出ス處、本書火災ニカヽリテ、今ハ寫シ傳ルナリトイヘリ、此書生駒記ニモ載セテ、其說曰右願書年號平氏元暦元年二月十五日ト書リ、愚按ニ此年甲辰改元四月十五日ナレバ春ハ壽永三年ナリ、殊ニ元暦ハ安德帝ノ暦號ナラズ、平氏是ヲ書事不審也、攝州一谷合戰甲辰二月七日落去、同八月八日範賴西國發向、鎌倉首途ス、讃州八嶋合戰ハ翌乙巳年二月十九日ト東鑑ニ有、此年文治ト改元、八月十四日也、左有ハ元暦ト云處二年トアラハ、源氏ハ可ナランカ、サレトモ合戰十九日ナレバ廿五日ト記スコトモ是亦齟齬セリ、勿論平氏ノ可用年號ニ非ル也、且範賴讃州ニ向フコト未聞、假名ヲ載ル計ニヤ、不審多シ、爾ルニ此社神寶甚多シ、專ニ武器ヲ以テ寶物トス、由緒アルコトト見ユ、仍之兩家ノ願狀有所ニ任セ姑ク出シ置ヌ、後人是ヲ糺セ、此說能イハレタリ、サレド此末社ニ平家祠抔アリテ由緣ナシトモオモハレズ、又二宮ト云モ一宮ニ續キタル由ノ名ト聞ユレバ、當時最貴ミシ祠ニモ有ヘシ、年號ナドハ後ヲ前ヘ廻ラシテ書コトモアレバ後人ノ心ナク改メ書シナラントモイフベケレド、文辭姓名ナドニ於テモ、疑ヒナキニ非ス、思フニ、當時カヽル書アリシト云ヲ聞傳ヘシ人ノ推量リテ作リナセルモノカ、イカニモ信難キ書ナリ、

源三位賴政　三井村ニ源三位賴政ノ居趾アリ、相傳フ賴政此ニ居テ加茂明神ヲ齋ヒ祭リ、氏神ト崇メリ、居趾田中ニアリ、廻リ二隍アリ、ソコニ若宮祠アリ、賴政ヲ祭レリ、其祠ニ系圖一卷獵裝束ナト納マレリシヲ、生駒公ノ時彼祠再興ヲ願ントテ、高松ノ府ニ出シタリシガ、火災ニカヽリ失ヘリ、其南一町バカリニ、門ノ跡トテ今御門トヨベリ、又的塲埒跡ナトモアリ、又矢留松吉原村ニ矢筐塚ナト云モアリテ、矢留松ハ賴政ノ遠矢ヲ試ミシ處、矢筐塚ハ筐ヲ其處ヨリ取タリト云リ、○今按ニ賴政彼地ヲ領知セシヿ書ニ見エズ、サルニ彼村ニ須藤氏ナル者賴政ノ裔ト云傳テ、其家ノ記ニ多度津ノ内ニ三井田ト云田ノ字村々ニアリ、賴政ノ末族領知セシ地ナリトイヘリ、サレバ賴政ノ子孫コノ地ニ下リシ者、賴政ヲ若宮ト祭

リタルヲ即チ賴政ノ此ニ居タリト傳ヘタリシニヤ、又思フニ賴政ノ女ノ二條院ニ仕ヘシヲ、讃岐トイヘリ、是ハ和泉守橘道貞ノ室ヲ、和泉式部ト云シ例ニヨレバ、讃岐守ノ室タリシニヤアラン、是等モ緣アルカ、尙ヨク考フベシ、

貴峯山城　大見村ニアリ、藤田四郎入道宗遍居レリ、宗遍近江國ノ人ニテ山王祠ヲ建テ、氏神ト崇メ祭レリ、當時祭祀ノ時ハ、老職ノ者神輿ニ供奉セリ、宗遍落城ノ後、其家臣宗遍ヲ總官宮ト祭リ、其臣神輿ヲ供奉セシニ、何時ヨリカ其家衰ヘ、持傳ヘタル田畑賣拂ヒタリシニ、其田ノ買主今ニ至ルマデ、祭祀ノ役ヲ勤ムト云、總官宮、山王祠ヲ去ルコト東一里バカリニアリ、

阿久瀬城　上之村石野ニ阿久瀬城、奥之内城又同村朝早田城、又野田原ニ陣場ト云地名モアリ、何人居タリシカ詳ナラズ、或云長宗我部氏ノ來リ攻メシ時要害ニ構ヘシニモアルベシ、

三度柿　上之村山才ニアリ、年二三度實ナレリ、

叢蓍　大見村祈禱ニ生ル最ヨシトイヘリ、

圓座　莊村ニ勸太夫ト云者、讃岐圓座ト稱テ、世々是レヲ作レリ、其製一子ノ外傳ヘズ、今ニ至ルマデ、多度津君御世代リノ節獻納ス、

佐以々々跡　上之村石野ノ里人大旱ノ時、龍王祠ニテ踊レリ、住吉、御前、御殿庭、吉野山櫻、京かなこ、谷道川、ひんた早乙女、花籠、眞實ふみ、ふんこみのかさ、ごとうる、こよらゝく、さいく、トナ十二段アリ、既ニ記セル、綾子大原木ナトニ同シサマナレハ畧ケリ、

人面石　碑殿村鳥坂ニアリ、高二間三尺、幅七尺、眼鼻口等ノ形アリテ頗ル人面ニ似タリ、

堀江賴直　賴直或ハ賴方トモアリ、初九郎左衞門ト稱ス、後治部齋ト改ム、近江國坂田郡大鹿村ノ人ナリ、我　先公ニ仕ヘ、祿秩六百石、出テ京師ノ留主司タリ、書ヲ藤木甲斐ニ學テ仙齋春澤等ノ數人ト同ク、高弟ト稱セラル、又笙法ヲ加茂敦道ニ受テ、頗ル其妙ヲ極ム、逸風之ト號ス、和歌ヲ好ミ、笙道ヲ以呂波歌ニ作リテ、諸子ニ敎フ、後仕ヲ辭テ、四方ニ遊歷シ、元祿六年正月十七日、安藝國ニテ沒ス、齡八十二、江戶ヨリ丸龜ニ歸ル、行記アリ、其中ニ詠ル歌多シ、今聊コヽニ載ス、品川の宿にて、「行

聞通の人に我世を思ひしる品かはりても安からぬ身歎、」さかみ川につく、秋風北よりふきて、身にしみけり、處の者此風の名を、ならひといひて、天氣ばつゝきて、よからむとかたる、「風の名もおのかさま〳〵いひかふる所ならひの朝けさむしも、」手こしまりこもすきて、うつの山にかゝれは、馬よりおりてゆく、在五中將夢にも人にとよみ給ひしは、おもふによそへてなむ今もわふ人まれに、さびしき道なり、蔦楓かつ〳〵ちりて、木深き陰を分入ほど、宮城野ならねど、雨にまさる木の露のたもとに、おくるゝそいとわひし、「うつの山さらても旅は悲しきに袖にしくるゝ蔦のした露、」濱名の橋の處をたつぬれは、町よりすこし北の汀を、跡なりとをしふ、そのかみは引佐細江よりのなかれ、今のあらゐきはをおちぬる故、橋をかけたりしに、いま切の入うみとなりしより、たえたるとなん、「きゝわたる濱名の橋を尋ぬれは、跡もなきさの松風の聲、」高師やまにかゝりて、「朝霧のはれ行峰の高師山ふもとに荒の聲を殘して、」關か原の半道はかりこなたに、野上の宿といふ有、昔安にありける、白拍子常に扇を愛せしによりて時の人班女とよひしとなり、それか屋敷の跡あり、町より南の山よせにて、藥師をいはひまつるとかたる、「身にしむは昔の人の手にならす、扇の風やふきつたふらん、」清洲の御墓にまいり、ありたてまつれば、いと悲しうなりて、又みつしの前に來たり、「をしからぬ身をはさそはて松風のたもとの露をなに拂ふらん、」關の藤川にて、「心をは關の藤川とゝむれと涙よとますなかれけるなり、」廿四日月よりさきにと、つゐまつの火して、豐原をいで云々、「しら露のおき出て行秋の夜の明野かはらに殘る月影、」

武皷王　讚岐史ニ、武皷王ニ世綾鵜足、行ニ開墾治伐之功、賜ニ國造之號、後移所レ居之地、俗稱ニ鵜足郡、三世綾隈玉、仁德天皇八年庚辰、徙ニ于井上郷、四世綾眞王、五世鈴甲、六世酒部鵜隈、七世那珂、首領成善、八世酒部善滿、長者九世郡家戸主酒部善里、十世木德戸主和氣善茂、十一世原田戸主長者和氣道善、弟和氣道隆、十二世原田戸主長者和氣宅成、十三世原田戸主長者和氣善甄、〇今按ニ神櫛王ノ裔ニ篠目命ト云アリ、鵜足明神ト祭レルコト既ニ云リ、コヽニ綾鵜足トアル恐ハ同神ナルベシ、サルニ武皷王ノ子トナシタルハ、是非詳ナラズ、サテ和氣酒部ハ神櫛王ノ裔ナルコト、古書ニ見エテ既ニイヘリ、是ヲ綾姓トナシタルハ、覺束ナキコトナリ、スベテ神櫛王ト武皷王トノ系圖互ニ混レテ辨ヘ難キコト是ノミナラズ、他ノ系圖ニモ多カリ、心シテ取ベキナリ、又郡家郷ヲ古ヘ戸長郷トイヘリト記シタルモノアリ、是ハ郡家戸主長者ナドアリシヲ、主ノ字脱タリケンヲ、戸長ト誤リ謬シニモアルベシ、又粟隈アタリヲ隈玉郷トイヘリト、今モ傳ヘリ、是ハ此隈玉ニヨリタル名カ、是ハヤウナキコトナレド、因ニイフノミ、

八幡宮　同書ニ延久五年癸丑八月、課ニ那珂郡山北村、同郡金倉郷、多度郡葛原郷、同郡ニ井村、堀江濱、各地頭ニ創ニ建八幡宮ニ修ニ放生會ニ〇右明王院縁記ニアリトテ、載セラレタリ、是說ノ如クナレバ、此アタリノ八幡宮、皆同時ノ創造ト聞エタルニ、今處々ニ云傳ル處、各同ジカラズ、思フニ是ハ後推當ニ作リナセルモノニヤアラン、此時山北ト云村アラズ、山北ハ飯山ノ北ニ彼社ヲ建テ山北八幡宮トイヘルニテ、村ノ名ニハ非ズ、尚丸龜浦トイヒシゾ舊キ名ニハアルヲヤ、凡此編野乘口碑併セ取ルトイヘトモ、浮說實ヲ失フニ至ル者ハ、取ラサルモ亦多シ、

善通寺　南海流浪記ニ仁治四年三月廿一日、善通寺ニ詣テ大師御跡ヲ巡禮ス、金堂ハ二階七間也、靑龍寺ノ金堂ヲ被レ模トテ、二階各今少引入リテモコシアルカ、故打見バ、四階大伽藍、是ハ大師御建立于今現在セリ、御作丈六藥師三尊四天王像イマス、皆埋佛後壁ニ、又藥師三尊半出ニ埋作ラレタリ、七間講堂ハ破壞後、今新造堂五間、常堂同新造立、大師御建立、二重寶塔現存、木五間今修理之間、加前居廟一間云々、於此內奉安置御筆御影、此御影大師御入唐之時、自圖之奉レ預ニ御母儀ニ云々同等身像云々、大方樣如普通御影、但於左之松山上釋迦如來影現形像有之云々、凡此善通寺ノ本ハ四面各二町、其內種々堂舍寶塔灌頂院、護摩堂、嚴羅例、今皆破壞シテ、纔礎石計在之、御筆之額二枚有之、皆善通寺トアソハサレタリ、其外大寶樓閣タラニアソバシタル額二枚有之、皆破損云々、抑善通之寺ハ大師御先祖、俗名爲寺號云々、破壞之間、大師修造建立之時、不レ被レ改ニ本號ニ歟、金堂之西有一直路、一町七段許者則自

寺中參御誕生所之路也、則參詣拜之、正御誕生所ニハ石高ク廣疊タリ、今如法經奉納之、七重石塔有之、大樹少々有之、拜見之間、戀慕渇仰催涙拆膽」 高野山岩のむろとにすむ月の此ふもとより出にけるかさは、」 此誕生所ハ西方五兵山ト云テ五佛ノ高山ノアル其麓也、同日午刻於講堂有法華講大師御報恩云々、其後有童舞云々其日及晩景不能進向即通夜御影堂云々」 寛元二年甲辰正月之比、當寺之童舞裝束被調事、再會日發願文事、同六月十五日夜、多度郡田所入道（號堀池入道隨佛）夢想ニ云、御誕生所ノ石壇南邊ニ、大ナル蓮花生タリ、莖長六尺許、大乘今許、初ハ合テ漸開、其色其香美妙也、諸人集會シテ拜見之、隨佛作奇特之想、問云是何ナル蓮花ソ、如是妙ナル人答云是ハ高野上人、御房蓮花云々合掌瞻待シテ夢覺了云々

弘法大師御影　同書ニ寶治二年戊申四月之比依ニ高野二品親王仰ニ奉レ摸ニ當寺御影、此事ハ年ニ雖レ被レ下ニ御使、當國無ニ淨行佛師ニ之由、依ニ申上、今年被レ下ニ佛師成祐、（鏡明房） 奉摸寫之、所謂佛師四月五日出レ京、九日下ニ着堀江津、同十一日當寺參詣、同十三日作紙形、當日於御影堂、佛師校ニ梵網十戒、其後紙形自同十四日圖繪、同十八日終其功、所奉摸 御影、其御影形色竟盤モ無レ違ニ本御影ニ云々、同十八日寺僧評議令此佛師改押ニ本御影之裏、加ニ御修理ニ云々、以上此等間、不出御影堂、佛師下着之時、（院主綱一定）三昧各淺黄一切給之、凡此御影者當寺之古老相傳云、大師御入唐時、爲御母儀、自摸寫我像、爲ニ告面之率坊（米ノマヽ）云々」 承元二年讃岐院御時、立位大臣殿當國司之間、依ニ院宣被奉迎寺僧再三日上古不レ奉レ出ニ御影堂ニ之由、雖レ令レ言ニ上子細、數度依レ被ニ仰下、寺僧等頂ニ戴之、上洛御拜見之後被レ奉レ摸レ之、給師御下向之時、生野六町免田寄進云々」喜祿元年九條禪定殿下、攝錄御時奉レ拜レ之、（給師ハ唐人） 又摸寫之御下向之時、免田三町寄進云々、」同年六月二日御上洛、同十五日高野參着、即御拜見御歡喜云々、同十八日御報書云々、御影無爲ニ奉渡事返々悦入候宿善開發、數及落涙、心中可被察之云々、 ○今按ニ此御影俗ニ目引大師ト云ヨリ、怪キ傳説アリ、三代物語ニ載ス、サレド佛師此地ニ下リテ、摸寫セシコト此文ニヨリテシルケレバ、今トラズ、又彌谷寺ノ記ニ、寛

文九年善通寺御影堂燒亡ス、此時大師眞筆ノ影像燒タリ、時ニ誕生院法印發貞是ニ因テ遁世退居ス、因テ高野山ヨリ宥謙ト云碩德ヲ入院ナサシメ、彌谷寺秘藏ノ御影眞筆ニ紛レナキ由ニテ、宥謙彌谷寺ニ至リ、是ヲ請受テ、入佛供養ス、是今ノ影像ナリトイヘリ、

瀧寺　同書ニ十一月十八日參ニ詣瀧寺、坂十六町此寺東向高山有瀧、古寺礎石等處々有之、本堂五間、本佛御作千手云々、此寺ハ大麻山ナル葵瀧ノアタリニアリシト云傳ヘリ、今ハ何ノ趾モ見エズ、又同書ニ稱名寺ト云ヲモ載ス、是ハ此山ノ麓ニテ、今地ノ名ニ殘リテ、聊其趾アリ、

菅木　津森村天神ノ社ニ、古木ノ枯タル一株アリ、高野山大覺院ノ僧來リテ、是菅木ナリ、世ニ最稀ナル木ナリ、辨慶ノ題字アルベシトイヘリ、能見レバ、天ノ字アリテ、外ハ消テ明ナラズ、是ヨリ前ニハ名無木ト云テ、知者ナカリシトナム思フニ此僧見聞スル所アリテイヘルカ、ハタ推アテニ人ヲ欺カセシカ菅木ト云モノ世ニアルコトヲ聞ズ、サレド是マデ名無トイヘルハ、此木枝葉ナドアリシ時ヨリ、世ニ見慣ヌ木故イヒシカハ、ソレモ知リ難シ、

中納言爲顯卿歌　朝さきに漕出て見れはいよ路なる嵩生の山に雲のかゝれる、」 此歌家浦ニテヨメルナリト、彼浦人云傳ヘリ、是ハ明玉集ニアリト、秋寐覺ニ見エタレト、未ダ本書ヲ見サレバ決メ定メ難シ、

ギウ〳〵玉　安永年中、東高野村ノ農夫、萬治郎寶珠寺ノ舊趾アタリニテ、玉ヲ堀出セリ、其玉掌中ニ置バ、ギウ〳〵ト鳴音アリ、因テギウ〳〵玉ト名テ秘藏セシガ、許價モアルベキ物ト思ヒ、京師ニ持出シガ、イカヾナリケン、歸リ來モセズ、音信モナクナリシ、又粟島ニ馬角猩々毛瑠璃珠ナド持ル者アリ、馬角ハ五郎右衞門、猩々毛瑠璃珠ハ平九郎ノ家ニアリ、又生里浦ノ人甚兵衞ノ父祖、朝鮮ノ役ニ水夫ニテ渡リ、銘ヲ得テ歸リ、是ヲ取歸ノ銘ト名テ其家ニ傳ヘリ、

道福寺　季瓊日錄ニ、寛正二年　月十三日、讃岐國道福寺祥東首座、越後國普濟寺合與首座、公文御判被遊也云々、今道福寺村ニ高福寺トテ、一向宗ノ寺アリ、昔道福寺トイヒテ、行基ノ開基ナル由イヘリ、

大水上神社　古史成文ニ大山積神亦名云ニ大水上神ニトアリ大水上神社ハ此神ヲ祭レルニヤ、

比地村　古事記ニ多遲摩比泥ト云人アリ、天之日矛之後ニテ但馬國ニテ生レシヿ見ユ、サテ神名帳ニ但馬國出石郡日出神社又日遲神社アリ、比泥日出比遲共ニ音通ヘレバ此人ヲ祭レル社ナルベシ、此人ノ孫ヲ多遲麻毛理トイヘリ、同國養父郡ニ杜内神社アリ此人ヲ祭レリ、今比地村ノ氏神ヲ森大明神ト云ハ或ハ此人ヲ祭リタルニテ、比地ハ是ニ由アル名ニヤアラン、

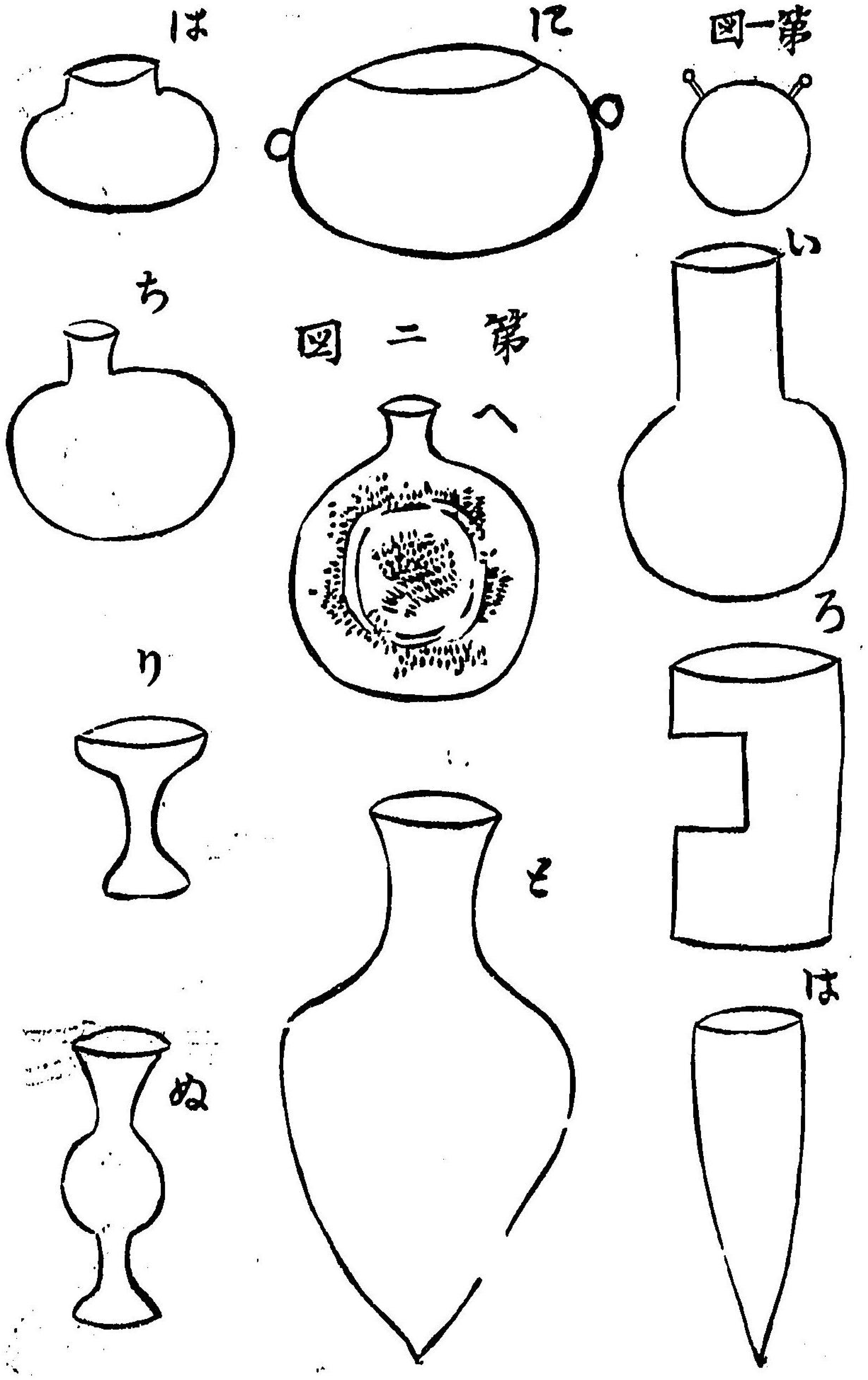
星谷　背木村ニ、星谷ト云地アリ、一大石アリ、中程ヨリ二ニ割テ、其ハザマヨリ梅生タリ、其梅世ノ常ナルヨリ遲クサキテ、花ノ形杏ニ似タリ、近キ頃枯レテ株ノミ殘レリ、相傳フ昔星落テ梅生タリ、因テ星谷トイヘリ、今按ニ星ノ落テ梅生タリト云ハ、傳ノ誤ナルベシ、星落テ石トナレルガ、即テ其石ノハザマヨリ梅生タルナルベシ、尾張國風土記ニ玉置山ニ有二一小石一、昔人云赤星之所落也、山麓有二星池一、星之常宿所也、亦有二怪石一、星之所化之石也、猶曰二星落一焉ト見ユ、此類ナルベシ、又春秋傳ニモ隕二石于宋一五隕星也トイヘリ、

屏風浦　山家集ニ「屏風にや心を立て思ひける行者はかへりちごはとまりぬ」トアル歌ヲ、屏風浦ニテヨメルナリトテ、諸抄ニ引用ヒタレド、是ハ西行大峰詣ノ時、行者かへりちごとまりびやうぶ立ナト云處ヲ、過テヨメルニテ、爰ノヿニ非ズ、又或言ニ弘法大師都ヨリ故郷ニ歸リ玉ヒ此處ヲ初テ、屏風浦ト號シトナム、「立かける屏風の浦の春霞世にあふさかの關はこさしと」是モ山家集ニアリトテ引レタレド、彼集ニ見エズ、又屏風浦ト云コトイツノ頃ヨリイヘルニヤ、舊キ名ニモ非ズ、又里人ノ何トナク呼ナセル名トモ聞エズ、後世ノ好事者名ケシニモヤアラン、サテ是ヲ善通寺ノコトトモ、又白方ノヿトモイヒテ、論フ人アルハ空海ノ生レタル由ニヨリトヤカク云ナルベシ、サレド善通寺ハ空海ノ建ラレタル寺故、昔ヨリ尊ミツルニテ彼寺地即テ空海ノ産レシ處ト思フハ、取極テ狹キ説ナリ、空海ノ産レシ故其地ノ尊キニハアラサルベシ、古書ニ多度郡ノ人トアレバ、産レ落タル處ハ何處ニモ有ベシ、其産室ノ處ハ今知ルベカラズ、ヨシ知レタリトモ、サノミ尊ムベキニ非ズ、古ヨリ空海ニオトラヌ人多カレド、其生レシ處ヲ尊ム例外ニアルコトナシ、智證ハ木德ノ人ナルニ、金藏寺ヲ稱

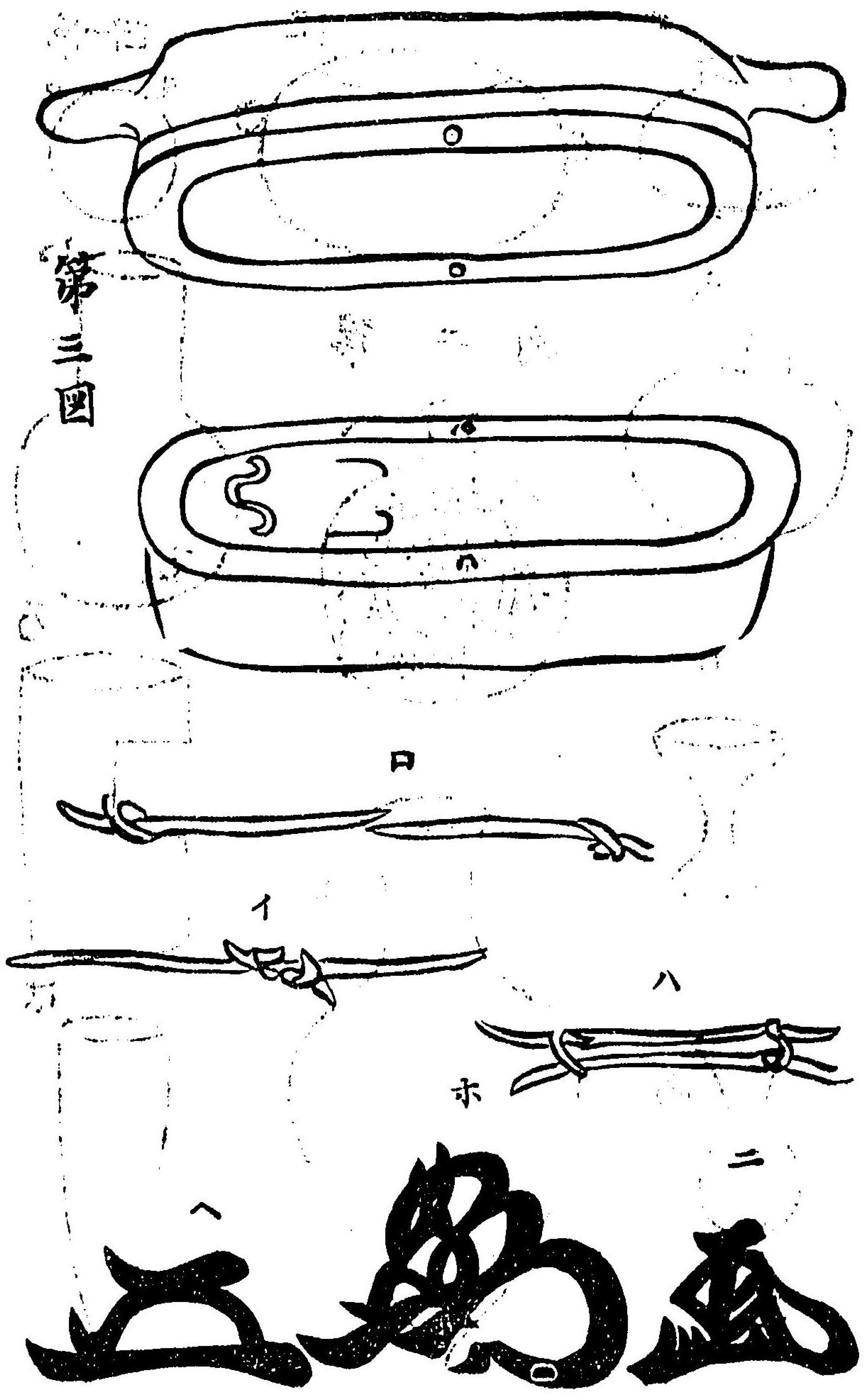
ムヲモオモフヘジ、サレド浦ト云ハ海濱ノ名ニテ字書ニモ浦水濱也トアリ、又三教指歸ニ頤日闍刹那幻住於南閻浮提揚谷輪三所化之下玉藻所歸之島、櫲樟蔽日之浦トアルハイツノコトナリヤシラズ、善通寺ノ記ニハ今ノ伽藍ノ櫲樟ヲイヘルナリトイヘリ、

青龍水　吉原村青龍祠ノ東ニ青龍水ト云アリ、相傳フ仁壽元年九月朔日、一青龍飛下リ、三日三夜ヲ經テ去ル、其跡ヲ見レバ、一淸泉涌出タリ、時ニ神村巫ニ託リテ、此水眼病ヲ療スベシ、故其病ヲ患フル者此水ニテ洗ヘト云ニ、村人驚キ此泉ヲ神水ト崇メリ、香川信景ノ子、松之助賴景ト云アリ眼ヲ患ヒツルニ、家士託間大炊此水ノコト稱シケレバ、時ノ祠官松岡刑部ニ命セテ眼ヲ洗ヒシカバ、忽驗アリ、是ヨリ此水ノ妙ナルコト、世皆知リテ今ニ至ルマテ其驗多カリ又霖雨ニモマサズ、大旱ニモ涸ズト云、

西讃府志大尾


第一図
第二図
い
ろ
は
に
は
へ
と
ち
り
ぬ

第三図



明治三十一年四月十一日印刷
明治三十一年四月十五日發行

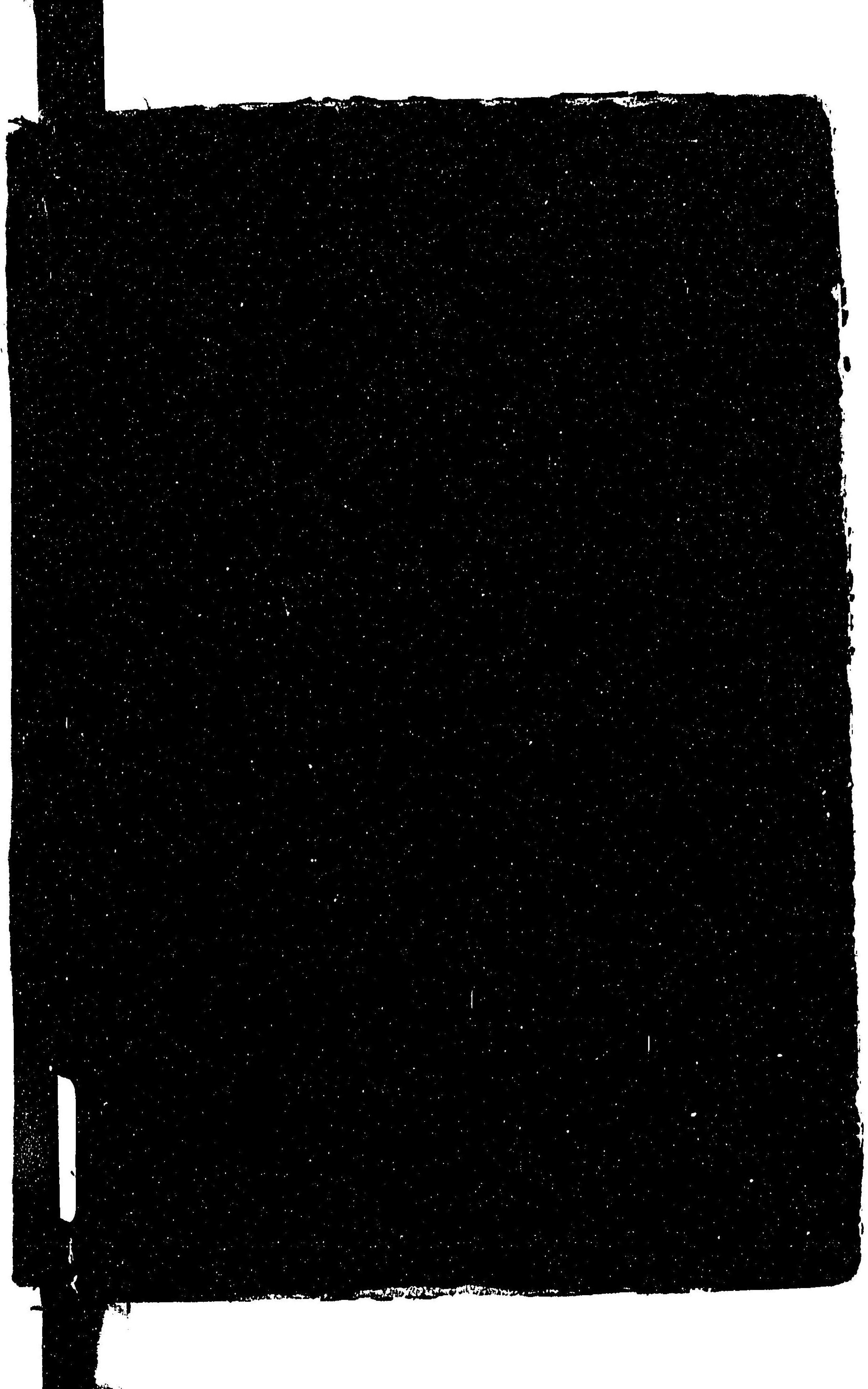
訂正兼發行者　東京市本郷區向岡彌生町三番地村瀬方
堀田璋左右

印刷者　東京市神田區表神保町二番地
三島宇一郎

印刷所　東京市神田區表神保町二番地
弘文堂

發行所　東京市下谷區入谷町百四十二番地内
那珂多度同志會

79
40



79
40

026089－000－9

79－40

西讃府志

堀田 璋左右／訂

M31

ADC－3743